

(2) 鳥類

鳥類は日本鳥類目録改訂第7版に24目81科633種が記録されており、埼玉県ではこれまでに23目75科380種が記録されている。本書を刊行するにあたり、そこから移入種(27種)や通過鳥、迷鳥などを除いた181種を対象に本県における生息状況を調査した結果、その約64%にあたる115種をレッドリスト掲載種とした。レッドリスト種の選定にあたっては、既存文献の収集解析に加え(公財)埼玉県生態系保護協会、日本野鳥の会埼玉、秩父愛鳥会などの会報に掲載された観察記録をデータベース化し、現地調査を踏まえて解析した。

なお、鳥類は飛翔による移動力が極めて大きいことから、野鳥の確認記録がそのままその種の安定的な生息状況を示すものとは限らない。そうした観点から、「埼玉の鳥とけものたち」(埼玉県, 1986)では、生息地あるいは生息環境との結びつきを明確に示す「繁殖鳥」及び「越冬鳥」の概念を用いて、その鳥類がその場所に定着しているのか、あるいは一時的に出現した通過鳥や迷鳥に過ぎないのかを区分した。今回のレッドリスト掲載種の選定に際しても、前版の考え方を踏襲し、「繁殖鳥」と「越冬鳥」からカテゴリー別の該当種の検討を行った。「繁殖鳥」と「越冬鳥」の定義は以下に示すとおりである。

【繁殖鳥】 巣・卵・ヒナ等の確認、若しくは、その種の繁殖期間内に最低3週間以上同一場所に生息し、囀り、求愛などの繁殖行動により、同地域で繁殖していると考えられるもの

【越冬鳥】 冬期間(主に11~2月)に、最低3週間以上にわたって、同一場所で生息が認められ、同地域で越冬していると考えられるもの

これまでの鳥類の掲載種数の変遷をみると、初版の92種、改訂版の101種、前版の104種、そして本書の115種となり、徐々にではあるが絶滅を危惧すべき状況にある鳥類は確実に増加していることがみてとれる。

これらの中には、記録数が増え、前版からランクが下がったオオバン(CRからNT1)とカワセミ(LPからRT)の2種がある。また、アオサギやイソヒヨドリ(前版DD)のように、急速に分布を広げ個体数が増加傾向にあることが確認され、今回レッドリストから外した種が7種ある。前版からランクが上がった種は、ウズラ(ENからCR)、シラコバト(VUからEN)など21種、また、新たにレッドリストに加わった種は、コサギをはじめとして18種に上り、調査した多くの種について生息状況が悪化していることが明らかになった。

その原因として、まず生息環境そのものの消失があげられる。低地帯や台地・丘陵帯にかけて都市化が進み、まとまった緑地や樹林地の減少や劣化は森林性の鳥類にとって営巣地や採食場所の喪失を招いている。かつては低地林や屋敷林でも繁殖していたサンコウチョウは低地帯から姿を消し、現在はごく限られた丘陵帯や低山帯で繁殖しているに過ぎない。台地・丘陵帯や低山帯で繁殖していたミゾゴイ、サンショウクイ、コサメビタキ、クロツグミなども減少の一途を辿っている。同様なことは農耕地とその周辺の草地や疎林帯を生息場所としているモズ類やホオジロ、ヨタカなどの鳥類にも当てはまる。チゴモズやアカモズは確認記録がなくなってから久しく、モズやホオジロを托卵相手としているカッコウの減少原因の一つと考えられる。

低地帯の河川・池沼・低湿地・草地などに目を向けると、荒川、利根川などでは中流域の河川敷の整備によって草原性の鳥であるウズラは姿を消し、ヒクイナ、タマシギなどの湿地性の鳥類が減少している。水田への依存度の高い湿地性の鳥類にとって、土地改良や用排水路のコンク

リート三面水路は、餌となる魚類やカエル類の減少といった影響が大きいと思われる（内田・成末, 1993）。また、ヨシ原の減少に伴い、ヨシ原を営巣場所としているオオヨシキリやコヨシキリ、ヨシゴイなどの鳥類が減少している。

チドリ類、イソシギ、コアジサシといった河原や砂礫地に生息している鳥類の減少も著しい。コアジサシは利根川中流域を除いては工場や住宅地等、大規模な造成地で繁殖しているが、利根川では流路の変化等で毎年のように河川の状況が変わるため、永続的に営巣地として利用できる中洲はない。また、治水が進んだことにより、砂礫地に草が生えるなど環境の変化も大きな影響を与えている。大規模造成地での営巣は造成途中の一時的なものであり、永続的な繁殖地とはなりえない。また、近年のアウトドアブームで河原に乗り入れる車が増えていることもこれらの鳥類の繁殖に悪影響を与えている。

かつては国の特別天然記念物に指定された「野田のサギ山」に代表され、埼玉県の水鳥の象徴でもあるサギ類にも変化が生じている。ダイサギ、アオサギなどの大型サギ類の個体数が増加傾向にある反面、コサギ、ササゴイなどの小型サギ類の個体数が著しく減少している（鳥田, 2016a）。農薬使用の減少や水質の改善に伴って餌となる大型魚類への有害物質の蓄積が減ったことが、大型サギ類の回復につながっているといわれているが、現段階では因果関係は明らかでない。小型サギ類が減った原因としては、餌となる小型の魚やエビなどを捕食するオオクチバスの増加が指摘（嶋田ほか, 2005）されているが、魚食性鳥類であるカワウの増加や営巣場所の環境変化も考慮しなければならない。

台地・丘陵帯では雑木林の管理放棄による植生の変化によって繁殖鳥に影響が出ている。樹木が大木化し成熟した林は、ヤマガラ、キビタキなどの樹洞性の鳥類に採餌空間や営巣場所を提供し、下層植生が藪化することによってウグイスなどの鳥類には好適な生息環境となった。減少するカッコウ類の中でホトトギスだけ増加傾向にあるのは、托卵相手のウグイスの増加によるものと思われる。

山地帯ではニホンジカの採食影響によりスズタケなどの下層植生が失われウグイス、ヤブサメ、コルリ、コマドリなど林床のササ類に生息する鳥類の減少が著しい。また、近年増加が著しいガビチョウやソウシチョウなどの外来種との競合、アライグマによる捕食などの影響も懸念される。特にフクロウでは、アライグマによる巣箱の乗っ取りが各地で報告されている。

カモ類等の水鳥類についても越冬する池沼、河川や周辺の餌場となる湿地、水田等の水辺環境の改変が進み越冬個体数が減少した状態が続いている。

このように繁殖鳥、越冬鳥いずれも絶滅に瀕する野鳥の種類が確実に増加し、極めて深刻化している状況は本県の野鳥を取り巻く生息環境の劣化を示すものである。

[付記] 次ページ以降の種ごとの解説において、形態や国内分布に関する項目は、桐原政志（2000）、高野伸二（1981）および環境省（1994、2004、2013、2014、2015）を参照した。また、種ごとの解説では、和名のあとに繁殖鳥と越冬鳥をそれぞれ（繁）（越）を付して識別できるようにした上で、レッドランクの高い順から並べている。繁殖鳥と越冬鳥の両方にリストされている14種については、（繁・越）としてそれぞれのレッドランクを付記した。

〔目名・科名〕 カモ目カモ科
 埼玉県(2018) EX 環境省(2014) EN

〔和名〕 **カリガネ (越)**

〔学名〕 *Anser erythropus* (Linnaeus) 指定状況 -

【形態】 全長 53 ~ 66cm、翼開長 120 ~ 135cm。全体が暗褐色でマガンによく似た小型のガンである。嘴周囲の白色が頭頂部に達すること、目の周囲が黄色いことでマガンと区別できる。

【国内分布】 九州以北に冬鳥として渡来するが少ない。

【主な生息環境】 広い水田、湖沼など

【県内での生息状況】 越谷市の宮内庁埼玉県鴨場周辺にて 1939 年 2 月に捕獲された記録がある。その後、2001 年 2 月に彩湖（戸田市）で 1 羽、2007 年 11 月に古利根川（越谷市）で幼鳥 6 羽の記録がある。

【特記事項】 ガンカモ調査ではここ数年近県での記録はない。全国的にみると漸増傾向であるものの、個体数は 100 羽程度である。近県ランク：千葉県 EX

〔目名・科名〕 カモ目カモ科
 埼玉県(2018) EX 環境省(2014) CR

〔和名〕 **シジュウカラガン (越)**

〔学名〕 *Branta hutchinsii* (Richardson) 指定状況 国内希少野生動物種

【形態】 全長 56 ~ 61cm、翼開長 122 ~ 130cm。他のガン類とは顔から首にかけて黒く、頬に白い部分があることで区別できる。

【国内分布】 本州以北に冬鳥として渡来するが極めて少ない。

【主な生息環境】 湖沼、河川、農耕地などに見られ、浅い沼沢地でねぐらをとる。

【県内での生息状況】 越谷市の宮内庁埼玉県鴨場周辺にて 1925 年 3 月、1929 年 2 月に捕獲された記録がある。2005 年 12 月～1 月にかけてロシアで標識されたものが、彩湖（戸田市）で確認された。2006 年 1 月にロシアで標識された別個体が、荒川（さいたま市）で確認されている。

【特記事項】 本種は一時絶滅したと思われていたが 1962 年に再発見され、アメリカの増殖計画が順調に進んだ結果、日本への 2016 年の渡来数は 1,200 羽を超えている。よく似た大型の亜種で観賞用に導入されたカナダガンは特定外来生物に指定され、2015 年に環境省が根絶宣言。
 近県ランク：なし

〔目名・科名〕 コウノトリ目コウノトリ科
 埼玉県(2018) EX 環境省(2014) CR

〔和名〕 **コウノトリ (繁)**

〔学名〕 *Ciconia boyciana* Swinhoe 指定状況 国指定天然記念物・国内希少野生動物種

【形態】 全長 110 ~ 115cm、翼開長 195cm。大型の鳥で全身が白色で風切羽が黒く足は赤い。嘴は黒色で太く長い。

【国内分布】 野生のものは 1971 年にいなくなり大陸から稀に渡来するだけであったが、放鳥されたものが国内各地で記録されるようになった。兵庫県、京都府では繁殖している。

【主な生息環境】 湿地、湖沼、水田、河川等の水辺に生息する。里山の生態系の頂点に位置する鳥である。

【県内での生息状況】 江戸時代に繁殖していた記録があるようだ。2 年前より放鳥したものが飛来している。2015 年 8 月加須市（2013 年京丹後市で放鳥）、2016 年 6 月三郷市・吉川市・松伏町、7 月川島町、10 月熊谷市（いずれも 2016 年 6 月野田市で放鳥）での確認記録がある。

【特記事項】 兵庫県豊岡市ではロシアから贈られたコウノトリの繁殖が軌道に乗り放鳥を続けている。隣接の京丹後市でも繁殖が確認された。また、千葉県野田市でも多摩動物園から譲り受けたペアの繁殖に成功し 2015 年から放鳥を開始した。飛翔力が強く四国や東北からの位置情報も入っている。近県ランク：千葉県 EX

【目名・科名】	ペリカン目サギ科	埼玉県(2018)	EX	環境省(2014)	CR
【和名】	オオヨシゴイ (繁)				
【学名】	<i>Ixobrychus eurhythmus</i> (Swinhoe)	指定状況			-
【形態】	全長33～39cm、翼開長55～59cm。ヨシゴイより一回り大きい、顔から背中にかけて栗褐色で下面是黄褐色。飛翔時、雨覆の淡色と風切の暗色のコントラストが目立つ。				
【国内分布】	夏鳥として渡来し、本州中部以北で繁殖する。				
【主な生息環境】	湖沼周辺の大規模なヨシ原等の湿地に生息するがヨシゴイより乾燥した場所を好み、魚類、両生類、甲殻類などを捕らえる。				
【県内での生息状況】	昭和10年代に三郷市での繁殖記録が残っている。県立自然の博物館には、60年ほど前に県内で採取された個体の剥製がある。他に、1992年8月7日伊佐沼(川越市)、1993年5月26日旧浦和市(現さいたま市)の秋ヶ瀬運動公園、1996年7月12日旧浦和市(現さいたま市)塚本地区の荒川河川敷での記録がある。				
【特記事項】	国内での繁殖地は茨城県稲敷市など局所的である。県内では上記記録後見られていない。 近県ランク：茨城県 CR、群馬県 CR、東京都区部 CR、神奈川県非繁殖期 VU				

【目名・科名】	ペリカン目トキ科	埼玉県(2018)	EX	環境省(2014)	EW
【和名】	トキ (繁)				
【学名】	<i>Nipponia nippon</i> (Temminck)	指定状況		国指定天然記念物・国内希少野生動物種	
【形態】	全長約76.5cm。全体に薄桃色で、顔の裸出部、嘴先端、脚が赤い。嘴は黒く下方に湾曲する。後頭部に長い冠羽があり驚くと扇状に広げる。				
【国内分布】	留鳥として、かつては全国に分布していたが、国内最後のトキは佐渡で2003年に死んだ。その後放鳥されたものが佐渡以外に新潟市、富山県、石川県で確認されている。				
【主な生息環境】	湿地、水田、河川等の水辺で餌を採り、広葉樹の大木で営巣する。				
【県内での生息状況】	県内の低地帯にかつて広く生息していたようだが、大正年間の採集記録がわずかに残されているのみで、その頃までに絶滅したと考えられる。				
【特記事項】	中国から贈られたものを佐渡で飼育増殖させ、これまで200羽以上が放鳥されている。また、放鳥されたトキから誕生した雛は推定80羽になっている。その他、国内では数か所の動物園で飼育されている。近県ランク：千葉県 EX、神奈川県 DD				

【目名・科名】	キジ目キジ科	埼玉県(2018)	CR	環境省(2014)	VU
【和名】	ウズラ (繁 CR・越 CR)				
【学名】	<i>Coturnix japonica</i> Temminck & Schlegel	指定状況			-
【形態】	全長20cm。体は丸味を帯びて尾は短い。上面は淡い赤褐色で黒と淡黄色の斑がある。下面是淡い黄褐色で胸と脇に白、褐色、黒の斑がある。黄白色の眉斑がよく目立つ。				
【国内分布】	主に北海道、本州中部以北で繁殖し、本州中部以南には冬鳥として渡来する。				
【主な生息環境】	平地から山地の草原、牧草地、農耕地、河川敷などに生息。				
【県内での生息状況】	1970年代の初め頃までは、農耕地や河川敷の草地などに、繁殖期においても普通に生息していたが、1990年頃から生息個体数が著しく減少した。夏季の確認情報はわずかで、繁殖の可能性はきわめて低い。利根川や荒川の河川敷の牧草地、草地などでは春季や秋季には時々観察されるが多くない。冬季においても減少傾向は続いている。				
【特記事項】	以前は狩猟対象だったが減少が著しいため2007年から一時的に狩猟禁止、2013年9月に狩猟鳥獣の指定が解除された。				

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
魚類・円口類
昆虫類
甲殻類
多足類
クモ目
軟体動物
扁形動物

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
魚類・円口類
昆虫類
甲殻類
多足類
クモ目
軟体動物
扁形動物

〔目名・科名〕 カモ目カモ科
 埼玉県(2018) CR 環境省(2014) VU
 〔和名〕 **ヒシクイ (越)**
 〔学名〕 *Anser fabalis* (Latham) 指定状況 国指定天然記念物

【形態】 全長 78～100cm、翼開長 142～175cm。全身が暗褐色で嘴は黒く先端が黄色。下面は白い。
 【国内分布】 冬鳥として全国に渡来するが局所的である。
 【主な生息環境】 広い池沼、河川、農耕地に渡来する。マガンが水田での採食を主とするのに対し、ヒシクイは池沼で水生植物を餌とする傾向が強い。
 【県内での生息状況】 現在は利根川、荒川等で少数が稀に記録されるにすぎない。2009年11月利根川（本庄市田中）で、2011年2月神流川（上里町忍保）で確認されている。
 【特記事項】 2000年代に入り個体数が増加しており、茨城県稲敷市や千葉県印西市に渡来する。ガンカモ調査結果：2015年茨城県124、群馬県1、千葉県1、2016年茨城県138、千葉県3
 近県ランク：茨城県 EN、群馬県 EN、千葉県 EX、東京都区部 EX

〔目名・科名〕 カモ目カモ科
 埼玉県(2018) CR 環境省(2014) NT
 〔和名〕 **マガン (越)**
 〔学名〕 *Anser albifrons* (Scopoli) 指定状況 国指定天然記念物

【形態】 全長 65～86cm、翼開長 135～165cm。全体が暗褐色で嘴はピンク色で周囲が白い。下面には不規則な黒い斑があり、足はオレンジ色。
 【国内分布】 九州以北に冬鳥として渡来する。
 【主な生息環境】 低地帯の河川・湖沼、農耕地で見られる。
 【県内での生息状況】 1960年頃を最後に群れでの渡来が途絶えた。その後、2001年に旧北川辺町（現加須市）で約150羽渡来した。その後は、少数が田んぼで落ち穂をついばんでいるところや上空の通過が記録されている。2012年には熊谷市で22羽、本庄市で25羽の群が記録された。単独個体や家族群と思われる小群が時おり記録されている。2016年には行田市で4羽の若鳥が見られた。
 【特記事項】 1971年に狩猟鳥から除外された。1970年の渡来数は約3,700羽であったが、2016年には18万羽にまで回復している。全国に渡来するガン類のおよそ95%を占める。ガンカモ調査結果：2014年栃木県、群馬県、千葉県で各1、2015年千葉県13、2016年茨城県1
 近県ランク：栃木県 NT、群馬県 EN、千葉県 EX、東京都区部 EX

〔目名・科名〕 カモ目カモ科
 埼玉県(2018) CR 環境省(2014) -
 〔和名〕 **オオハクチョウ (越)**
 〔学名〕 *Cygnus cygnus* (Linnaeus) 指定状況 -

【形態】 全長 140～165cm、翼開長 218～243cm。コハクチョウに比べやや大きく嘴基部は黄色で先端は黒い。この黒色部に黄色い部分がくさび状に入り込んでいる。幼鳥は全身が淡灰褐色で嘴基部はピンク色である。
 【国内分布】 冬鳥として全国に渡来する。
 【主な生息環境】 湖沼、内湾、農耕地、河川など
 【県内での生息状況】 県内には冬鳥として渡来する。県内に渡来するハクチョウはほとんどがコハクチョウで、本種はコハクチョウに混じるか単独で河川、遊水地、用水、水田などで見られている。2015年から2016年にかけて、芝川第一調節池（さいたま市）の他、近隣の遊水地で同一個体と思われる2羽の幼鳥が確認されている。
 【特記事項】 ガンカモ調査結果
 2014年：コハクチョウ165、オオハクチョウ0、2015年：コハクチョウ298、オオハクチョウ2
 2016年：コハクチョウ79、オオハクチョウ2

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
魚類・円口類
昆虫類
甲殻類
多足類
クモ目
軟体動物
扁形動物

〔目名・科名〕 チドリ目ツバメチドリ科
 埼玉県(2018) CR 環境省(2014) VU
 〔和名〕 **ツバメチドリ (繁)**
 〔学名〕 *Glareola maldivarum* Forster
 指定状況 -

【形態】 全長23～24cm、翼開長59～64cm。上面は茶褐色で黄白色の喉を縁取り両眼を結ぶ黒い線がよく目立つ。嘴は黒色で基部が赤く短い。飛翔時は翼が長く尾の短いツバメに似た形をしている。

【国内分布】 主に旅鳥として渡来する。これまでに本州、九州、沖縄などの農耕地や荒地で局地的に繁殖が確認されている。関東地方では茨城県、栃木県、埼玉県の各県で繁殖記録がある。

【主な生息環境】 荒地状態の草原、埋め立て地、河川敷など、シロチドリやコアジサシと同様な環境を好む。

【県内での生息状況】 1985年に利根川中流域で繁殖が確認された。上里町～熊谷市(旧妻沼町)にかけての利根川の中洲でコアジサシに混じり少数が繁殖しているようだが、その後の観察数が少なく詳細は不明である。荒川中流においても繁殖期の観察例があるが営巣の記録はない。

【特記事項】 春・秋は、農耕地や河原等において通過する個体が稀に見られる。

〔目名・科名〕 チドリ目カモメ科
 埼玉県(2018) CR 環境省(2014) VU
 〔和名〕 **コアジサシ (繁)**
 〔学名〕 *Sterna albifrons* Pallas
 指定状況 -

【形態】 全長22～28cm、翼開長47～55cm。翼と尾羽が長くスマートな体型であり、はたらくような特徴的な飛び方をする。夏羽では額は白く頭部は黒色で嘴は黄色で先端が黒い。体上面は青灰色で下面は白く足はオレンジ色である。冬羽では前頭部まで白くなり嘴と足は黒くなる。

【国内分布】 北海道、本州、四国、九州、南西諸島に渡来して繁殖する。

【主な生息環境】 海岸、干潟、池沼、河川等で魚を採餌し、その周辺で休息する姿が見られる。公園の池や養殖場などで採餌することもある。海岸、中洲、造成地、大規模駐車場など見通しのよい広い砂地や砂利混じりの裸地でコロニー(集団繁殖地)を作り繁殖する。

【県内での生息状況】 県内各地の池沼、河川、水路等でよく見られ、利根川流域では毎年の中洲で繁殖しているが、2016年は1ヶ所だけとなった。1996年以降、大規模造成地や駐車場などでの営巣が確認されているが、安定的に繁殖している場所はほとんどない。また、営巣地に草木が伸びてくると繁殖しなくなる。2014年以降では春日部市、越谷市、さいたま市、羽生市などの造成地、駐車場等で繁殖が確認されている。

【特記事項】 種の保存法による国際希少野生動物種に指定されている。東京都森ヶ崎水再生センターでは、屋上に砂利を敷き詰めてコアジサシの営巣に適する環境を作ったところ、毎年繁殖するようになった。外敵が近づくとコロニー内にいる親鳥が一斉に飛び出して追い払う行動が見られる。

〔目名・科名〕 タカ目タカ科
 埼玉県(2018) CR 環境省(2014) VU
 〔和名〕 **サシバ (繁)**
 〔学名〕 *Butastur indicus* (Gmelin)
 指定状況 -

【形態】 全長オス47cm、メス51cm、翼開長105～115cm。頭上から上面は褐色。喉には黒い縦線がある。下面は白く茶褐色の横縞がある。幼鳥では上面が暗色で下面には縦斑がある。

【国内分布】 夏鳥として、本州、四国、九州に渡来する。南西諸島では越冬するものもある。

【主な生息環境】 低山の林で繁殖し、林縁や農耕地、山林などでカエル、トカゲ、ヘビ、ネズミ、鳥類などを捕食する。

【県内での生息状況】 かつては、低地帯、台地・丘陵帯、低山帯の各地に夏鳥として渡来し繁殖していたが、現在は県内での繁殖情報が極めて少なくなっている。台地・丘陵帯で著しく減少している理由として、谷津田の耕作放棄や手入れ不足による生息環境悪化のため、本種の餌となるカエルやヘビなどが減少したことが原因の一つとして考えられる。春秋の渡りの時期には通過個体が県内各地で記録されている。

【特記事項】 サシバの語源として、尾羽が矢に使われたことから差羽になったという説がある。

【目名・科名】	ブッポウソウ目カワセミ科	埼玉県(2018)	CR	環境省(2014)	-
【和名】	アカショウビン (繁)				
【学名】	<i>Halcyon coromanda</i> (Latham)	指定状況			-
【形態】	全長 27cm。全身赤褐色で頭部から上面は紫色の光沢がある。				
【国内分布】	夏鳥として北海道、本州、四国、九州、南西諸島に渡来する。				
【主な生息環境】	平地から山地の湖沼や溪流近くの林に生息する。				
【県内での生息状況】	かつては、秩父地域や飯能地域の山間地の森林に夏鳥として渡来し、普通に繁殖していたが、現在は渡来数が激減し、夏季の確認記録はきわめて少ない。秩父の山間地からの生息情報がわずかにあるが、繁殖に関する情報もほとんどない状況にある。				
【特記事項】	主にカニ、カエル、ムカデ、クモ、カタツムリ、大型昆虫などを食べる。写真撮影など人為的なストレスが本種の生存を脅かす一因となっている。				

【目名・科名】	ブッポウソウ目ブッポウソウ科	埼玉県(2018)	CR	環境省(2014)	EN
【和名】	ブッポウソウ (繁)				
【学名】	<i>Eurystomus orientalis</i> (Linnaeus)	指定状況		県指定天然記念物	
【形態】	全長 29.5cm。頭部は黒褐色で、全身は青緑色。嘴と足は赤い。				
【国内分布】	夏鳥として、本州、四国、九州に渡来する。				
【主な生息環境】	平地から山地の林、集落近くの林、社寺林などに生息する。				
【県内での生息状況】	秩父地域や飯能地域に夏鳥として渡来し、山間にある社寺の大木や古木の樹洞に営巣するものが多かったが、現在は著しく渡来数が減少し、繁殖情報がほとんどない。本種の営巣場所となる樹洞のある大木や古木の減少が原因の一つと考えられる。移動中の個体が稀に観察される。				
【特記事項】	鳴き声は「ゲッ、ゲッ、ゲゲゲゲゲ」と濁っている。営巣木となる大径木をできるだけ保全することや、枯死、倒木などで営巣木が失われた場合は巣箱をかけるなどの配慮が望まれる。				

【目名・科名】	スズメ目モズ科	埼玉県(2018)	CR	環境省(2014)	CR
【和名】	チゴモズ (繁)				
【学名】	<i>Lanius tigrinus</i> Drapiez	指定状況			-
【形態】	全長 17～18cm。頭上から後頸は青灰色、背と尾は赤褐色で黒い黄斑がある。				
【国内分布】	夏鳥として渡来し、主に本州中部以北で繁殖するが、局所的である。				
【主な生息環境】	低地から低山の明るい広葉樹林や針広混交林に生息する。また、郊外の雑木林やゴルフ場の松林などでも繁殖する。モズよりは樹木の多い場所を好み、広い草原や河原にはいない。また、モズより高い枝に営巣することが多く、ササやぶには営巣しない。				
【県内での生息状況】	かつてはさいたま市、新座市、ふじみ野市などの低地帯や川越市、狭山市、入間市、所沢市など台地・丘陵帯の雑木林、ゴルフ場、果樹園、公園などで少数が繁殖していたが、1990年代頃より記録がなくなり、現在では確かな繁殖記録は得られていない。				
【特記事項】	世界的にも情報が少ないモズ類の1種で、渡り性のモズ類は一般に土地執着性が高いため局所的に生息が確認されなくなると、その場所に繁殖個体を復活させることは難しい。				

- 哺乳類
- 鳥類
- 爬虫類
- 両生類
- 魚類・円口類
- 昆虫類
- 甲殻類
- 多足類
- クモ目
- 軟体動物
- 扁形動物

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
魚類・円口類
昆虫類
甲殻類
多足類
クモ目
軟体動物
扁形動物

【目名・科名】 スズメ目モズ科

埼玉県(2018) CR 環境省(2014) EN

【和名】 **アカモズ (繁)**

【学名】 *Lanius cristatus* Linnaeus

指定状況 -

【形態】 全長 18～20cm。体の上面は赤みのある褐色、白い眉斑、太く黒い過眼線が特徴的である。

【国内分布】 夏鳥として渡来し、主に本州中部以北で繁殖するが、やや局所的である。

【主な生息環境】 低地帯から低山に渡来し、雑木林・農耕地・草原などの林縁や公園、ゴルフ場などの明るい林に生息する。木の茂みに営巣する。

【県内での生息状況】 かつては川口市、越谷市などの低地帯や、武蔵野台地上にある市町村で繁殖していたが、現在、繁殖の可能性がある場所は見あたらない。新座市の寺社、狭山市稲荷山公園、狭山丘陵周辺と雑木林、入間市など台地・丘陵帯で少数が繁殖していたが、1994年の入間市東町の繁殖記録を最後に確かな繁殖記録は得られていない。

【特記事項】 全国的に1990年代には大きく個体数を減じている。チゴモズと同様、渡り性のモズ類は一般に土地執着性が高いために局所的に生息が確認されなくなると、その場所に繁殖個体を復活させることは難しい。

【目名・科名】 スズメ目ホオジロ科

埼玉県(2018) CR 環境省(2014) -

【和名】 **ホオアカ (繁)**

【学名】 *Emberiza fucata* Pallas

指定状況 -

【形態】 全長 16cm。ホオジロに似ているが頬が赤褐色であること、胸に黒と褐色の帯があることで区別できる。

【国内分布】 本州中部以南で繁殖し、冬季には暖地へ移動する留鳥あるいは漂鳥。

【主な生息環境】 耕作放棄地などの灌木が混じる低茎草原等で繁殖する。冬は水田地帯で小群で越冬しており、歩いて行くと用水路などから飛び立つ姿が見られる。

【県内での生息状況】 県内には冬鳥または留鳥として低地帯、台地・丘陵帯の草地や休耕田、ヨシ原などに生息し、繁殖するものもある。これまで越生町、日高市、坂戸市、東松山市、吉見町、入間市、所沢市、三郷市、川口市等の河川敷や休耕田で繁殖記録があるが、現在は低地帯での繁殖記録は極めて限られている。

【特記事項】 日光戦場ヶ原、尾瀬ヶ原、朝霧高原等が繁殖地としてよく知られている。

【目名・科名】 カモ目カモ科

埼玉県(2018) EN 環境省(2014) DD

【和名】 **オシドリ (繁 EN・越 VU)**

【学名】 *Aix galericulata* (Linnaeus)

指定状況 -

【形態】 全長 41～47cm、翼開長 68～74cm。オスは美しい色の羽色で有名。額から頭頂部は暗緑色で後頭部に冠羽がある。目の周囲は白く頬の羽は栗色で長い。胸の横には黒と白の横帯が入る。三列風切りの1枚は銀杏羽と呼ばれる幅の広い羽となる。嘴は赤く先端部が白い。足はオレンジ色。メスは全身が灰褐色で、嘴も灰黒色。

【国内分布】 留鳥または夏鳥として北海道、本州中部以北で繁殖し、冬季は本州以南で越冬する。

【主な生息環境】 山間の湖沼や溪流近くの樹洞に営巣繁殖し、ドングリを好んで食べる。冬季は平地の湖沼や河川にも渡来する。春秋の移動時期には平地でも見られる。

【県内での生息状況】 県内では、荒川上流域(秩父市)での繁殖例(1988年7月2日に親1個体、雛1個体)があるが、繁殖記録は少ない。現在、夏季の記録がほとんど得られていない。冬季には、低地の河川や湖沼、ため池に飛来することもあるが、名栗湖(有間ダム)、桃湖(合角ダム)、玉淀ダムなどのダム湖や狭山湖のような山間の湖沼で越冬するものが多い。2015年以降の記録は著しく減少している。

【特記事項】 2010年冬季には、玉淀湖で424の記録がある。
ガンカモ類生息調査結果
2012年：65、2013年：125、2014年：106、2015年：9、2016年(暫定値)：0

【目名・科名】	ハト目ハト科	埼玉県(2018)	EN	環境省(2014)	EN
【和名】	シラコバト (繁 EN・越 EN)				
【学名】	<i>Streptopelia decaocto</i> (Frivaldszky)	指定状況	国指定天然記念物		
【形態】	全長 31～33cm、翼開長 47～55cm。キジバトよりやや小型で尾が長めで細い体型をしている。体色は淡灰褐色～紅灰褐色で首には黒い線がある。				
【国内分布】	埼玉県東部を中心に分布しており、周辺の県でも少数が見られる。				
【主な生息環境】	インドを中心とした乾燥地帯が原産地とされており、営巣時は別として林内を好む種ではない。耕作地、草刈り後の河川敷や水田の畔などで植物質の餌を採るほか住宅地でも観察されている。冬季は畜舎周辺でよく見られており、畜産飼料への依存傾向が強いと考えられる。養鶏場で鳥インフルエンザ侵入防止対策のため防鳥ネット設置などが進んだため、その周辺では見られなくなった。工業団地のような人工的な環境での繁殖例も多い。				
【県内での生息状況】	2000年頃までは東部地域を中心に広範囲に見られ近県にも分布域が広がり、推定1万羽ともいわれていた。その後急激に減少し2012年以降は県内で100羽程度となっている。県の調査では熊谷市、春日部市、加須市、鴻巣市、行田市、久喜市、さいたま市、幸手市、杉戸町、富士見市、三郷市、川島町などの記録がある。				
【特記事項】	1956年に「越ヶ谷のシラコバト」として国指定天然記念物となった。1965年には「県民の鳥」に指定された。県のマスコットであるコバトンのモデルになっている。江戸時代に鷹狩りの獲物として導入されたのが起源といわれており、鳥学会の最新目録では外来種の扱いになっている。県内の動物園で飼育されているものはよく繁殖しており、2015年末では150羽ほどに増えている。2013年に行田市内の石材店で1年に6回営巣し、11羽が巣立った記録がある。				

【目名・科名】	ペリカン目サギ科	埼玉県(2018)	EN	環境省(2014)	VU
【和名】	ミゾゴイ (繁)				
【学名】	<i>Gorsachius goisagi</i> (Temminck)	指定状況	-		
【形態】	全長 49cm、翼開長 87cm。ヨシゴイより大きくゴイサギより小さい。頭頂は赤栗色、背と肩は暗栗褐色で細かい黒色黄斑がある。嘴は短く上嘴は黒、下嘴は黄色。				
【国内分布】	夏鳥として本州以南に渡来する。				
【主な生息環境】	丘陵地や低山の良く茂った広葉樹林や針広混交林で繁殖する。営巣場所はケヤキやコナラなどの広葉樹を利用することが多い。日没頃、林から飛び出し、水辺などでサワガニ、カエル、ミミズ、魚類などを漁るが、日中でも暗い溪流で餌を捕ることもある。				
【県内での生息状況】	春秋の渡りの時期には低地の公園の林などで記録されることもあるが、主に台地・丘陵帯の森林で繁殖する。東松山市東平等の山林や比企・児玉丘陵等では1970年代まで繁殖記録があるが、現在確実な繁殖記録はない。2012年から2016年にかけて高麗・加治・狭山丘陵などの丘陵帯や寄居町、飯能市、秩父市、日高市、横瀬町などの低山帯で繁殖期に記録がある。また、低地帯の高坂台地（東松山市）でも繁殖期に記録がある。				
【特記事項】	2009年、韓国でも繁殖が確認されている。純森林性及び夜行性のため、生息実態の把握は困難である。そのため生息が確認されないまま開発によって生息地が失われている可能性がある。				

- 哺乳類
- 鳥類
- 爬虫類
- 両生類
- 魚類・円口類
- 昆虫類
- 甲殻類
- 多足類
- クモ目
- 軟体動物
- 扁形動物

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
魚類・円口類
昆虫類
甲殻類
多足類
クモ目
軟体動物
扁形動物

〔目名・科名〕 ペリカン目サギ科

埼玉県(2018) EN 環境省(2014) -

〔和名〕 **ササゴイ (繁)**

〔学名〕 *Butorides striata* (Linnaeus)

指定状況 -

【形態】 全長 40～48cm、翼開長 62～70cm。ゴイサギに似るが一回り小さく細い。嘴は黒く細長い。虹彩は黄色で冠羽は黒く足は黄色い。成鳥では上面は青味のある黒褐色で下面は青灰色。幼鳥は全体に黒褐色のため飛翔時は黒く見える。「キュウキュウ」というやや金属的な特徴のある鳴き声を出す。

【国内分布】 夏鳥として、全国に渡来して繁殖する。

【主な生息環境】 河川や池沼で魚類、甲殻類、カエル類を採食し樹木に営巣する。

【県内での生息状況】 主に河川において観察されるが繁殖地は限定される。過去には東松山市、坂戸市、皆野町、深谷市(旧川本町・旧花園町)、川越市の市街地の神社等で広く繁殖していた記録がある。また、1992年と1993年に彩湖(戸田市)での繁殖記録がある。現在、県内で繁殖している所は極めて少なくなりましたが、入間川では継続して繁殖している。

【特記事項】 春・秋の渡りの時期に低地で時々観察される。パン屑などを水面に落として集まってくる魚を捕えることが知られている。荒川では浮間公園(東京都北区)でも継続して繁殖している。

〔目名・科名〕 チドリ目チドリ科

埼玉県(2018) EN 環境省(2014) DD

〔和名〕 **ケリ (繁 NT1・越 EN)**

〔学名〕 *Vanellus cinereus* (Blyth)

指定状況 -

【形態】 全長 34～37cm、翼開長 75cm。ハトより大きく脚が長い。頭部は青灰色、上面は灰褐色で下面は白い。胸と腹の境に黒い線がある。飛ぶと初列風切の黒色と次列風切の白色のコントラストがよく目立つ。虹彩は赤く目の周囲は黄色い。嘴は黄色で先端が黒い。

【国内分布】 本州で繁殖し中部以南で越冬する。

【主な生息環境】 耕作地、休耕田、河川敷、草地等開放的な場所を好み繁殖する。

【県内での生息状況】 繁殖については吉見町で記録(1989年5月5日)があったが、造成されて以降観察されていない。さいたま市では継続的に繁殖が確認されており冬季も生息しているが、他地域での繁殖状況は不明である。低地帯での越冬記録は北本市、桶川市、草加市、富士見市、杉戸町、吉見町等がある。秋の移動期には低地帯で時々見られる。

【特記事項】 繁殖中は巣や雛に近づく鳥や動物に対して大きな声で鳴きながら威嚇し、飛びながら後を追いかける。人に対しても同様である。

〔目名・科名〕 タカ目タカ科

埼玉県(2018) EN 環境省(2014) -

〔和名〕 **ハチクマ (繁)**

〔学名〕 *Pernis ptilorhynchus* (Temminck)

指定状況 -

【形態】 全長 オス 57cm メス 61cm、翼開長 121～135cm。飛翔時首が突出して見える。翼は長く幅も広い。羽色は個体による変異が多い。

【国内分布】 夏鳥として北海道、本州、四国、九州に渡来し繁殖する。

【主な生息環境】 低山から平地の林に生息する。昆虫、ヘビ、カエル、鳥類などを捕食するが、特に、クロスズメバチなどのハチ類を好んで捕食する。

【県内での生息状況】 丘陵帯、低山帯、山地帯の各地に夏鳥として渡来し繁殖していたが、現在、県内での繁殖情報が極めて少なくなっている。春秋の渡りの時期には通過個体が県内各地で記録される。

【特記事項】 衛星による追跡調査が行われており、移動経路が知られるようになってきた。

〔目名・科名〕	タカ目タカ科	埼玉県(2018)	EN	環境省(2014)	EN
〔和名〕	チュウヒ (越)				
〔学名〕	<i>Circus spilonotus</i> Kaup	指定状況		国内希少野生動物種	
〔形態〕	全長 オス 48cm メス 58cm、翼開長 113～137cm。オスの羽色には変異が多い。飛行時、翼がV字型になる。メスは全身褐色で初列風切り先端部は黒い。また、風切りと尾には横縞がない。				
〔国内分布〕	冬鳥として全国に渡来する。東北北部、九州、西日本の一部では局所的に繁殖する。				
〔主な生息環境〕	平地の河川、湖沼、農耕地、草地、干拓地、ヨシ原などに生息する。				
〔県内での生息状況〕	利根川、荒川流域などの低地帯の河川敷やヨシ原、農耕地などに冬鳥として渡来し生息する。現在は、渡来数がやや増加傾向にある。				
〔特記事項〕	渡良瀬遊水地には毎年多くのチュウヒが飛来している。繁殖の可能性もあると考えられている。				

〔目名・科名〕	タカ目タカ科	埼玉県(2018)	EN	環境省(2014)	-
〔和名〕	ハイロチュウヒ (越)				
〔学名〕	<i>Circus cyaneus</i> (Linnaeus)	指定状況		-	
〔形態〕	全長 オス 43～47cm、メス 48.5～54cm、翼開長 98～124cm。飛行時、翼がV字型になる。オスの頭部と背は灰色で下面は白く初列風切りが黒い。メスは全身褐色で風切りと尾に横縞がある。				
〔国内分布〕	冬鳥として全国に渡来するが、チュウヒに比べ少ない。				
〔主な生息環境〕	平地から山地の河川敷、農耕地、草地、ヨシ原、干拓地などに生息する。				
〔県内での生息状況〕	利根川、荒川流域などの低地帯のヨシ原や農耕地などに冬鳥として渡来し、チュウヒと同様の環境に生息する。チュウヒに比べ渡来数は少ないが、現在、観察記録が増加傾向にあり、決して稀な鳥ではない。				
〔特記事項〕	ハイロチュウヒのメスはチュウヒによく似るが、風切りと尾羽に横縞がある。				

〔目名・科名〕	タカ目タカ科	埼玉県(2018)	EN	環境省(2014)	EN
〔和名〕	クマタカ (繁EN・越EN)				
〔学名〕	<i>Nisaetus nipalensis</i> Hodgson	指定状況		国内希少野生動物種	
〔形態〕	全長 オス 70～75cm、メス 77～83cm、翼開長 140～165cm。大型のタカで後頭部に冠羽がある。全身黒褐色で、幅広の翼を持つ。喉の部分は白く、中央に黒い線がある。				
〔国内分布〕	北海道、本州、四国、九州の山地に留鳥として生息する。				
〔主な生息環境〕	低山帯から亜高山帯の森林に生息し、山地の伐採地、若い植林地、草原などの開けた環境でウサギやヤマドリ、ヘビなどを捕食する。				
〔県内での生息状況〕	低山帯、山地帯、亜高山帯の森林に留鳥として生息し、繁殖する。個体数は多くないが決して稀な鳥ではない。両神山、城峰山、有間山、三峰山、熊倉山などでの観察例が多い。				
〔特記事項〕	名栗湖付近で繁殖が確認されている。				

〔目名・科名〕	フクロウ目フクロウ科	埼玉県(2018)	EN	環境省(2014)	-
〔和名〕	トラフズク (越)				
〔学名〕	<i>Asio otus</i> (Linnaeus)	指定状況		-	
〔形態〕	全長 35～37cm、翼開長 90～100cm。耳羽が長く尾も長い。上面は灰褐色で黒褐色の縦斑があり、下面は淡褐色で黒褐色の斑がある。虹彩はオレンジ色。				
〔国内分布〕	主に本州中部以北で繁殖し、冬は南方に移動する。				
〔主な生息環境〕	平地から山地の林、農耕地、草原、河原。				
〔県内での生息状況〕	県内には主に冬鳥として渡来するが、一部繁殖するものもある。低地帯から台地・丘陵帯にかけて小群で越冬することが多いが、単独で観察されることもある。加須市では連続して繁殖している。夜行性のため詳細は不明な点が多い。				
〔特記事項〕	冬季には人家近くで越冬することもあり、行田市では道路脇の木に潜んでいた。冬のねぐらでは写真撮影など人為的なストレスが本種の生存を脅かす一因となっている。トラフズクの越冬が確認できた場合には、人の立入など配慮することが好ましい。				

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

魚類・円口類

昆虫類

甲殻類

多足類

クモ目

軟体動物

扁形動物

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
魚類・円口類
昆虫類
甲殻類
多足類
クモ目
軟体動物
扁形動物

〔目名・科名〕 スズメ目サンショウクイ科
 埼玉県(2018) EN 環境省(2014) VU

〔和名〕 **サンショウクイ (繁)**

〔学名〕 *Pericrocotus divaricatus* (Raffles)

指定状況 -

【形態】 全長20cm。首が黒色で額は白色。背は灰褐色で、下面は灰白色。尾は黒く、両端は白色。翼には上下面とも白帯が出る。

【国内分布】 夏鳥として渡来し、本州以南の低地から山地帯の落葉広葉樹林で繁殖する。

【主な生息環境】 標高の低い山地や山麓の大きな落葉樹のある林に生息する。巣は大木の地上から数m以上の横枝につくる。樹上で昆虫などを捕り、高い枯れ枝や梢に直立した姿勢でとまる。

【県内での生息状況】 1950年代には低地帯の草加市や熊谷市等の屋敷林でも普通に繁殖していたが、三芳町上富の並木での繁殖を最後に1990年代以降は確認されていない。また、狭山丘陵、加治丘陵等の台地・丘陵帯や秩父市の山地帯でもかつては繁殖が記録されていたが、2000年代に入って夏季の記録はほとんどない。春秋には低地帯を含めて少数の通過記録はあるが減少が懸念されている。

【特記事項】 1980年代以降全国各地で急速に生息が確認できなくなった場所が増えている。ニホンジカの採食影響に伴い、食物となる飛翔性昆虫の生息環境の悪化による減少や、越冬地である東南アジアでの森林伐採などが影響しているとも考えられている。

〔目名・科名〕 スズメ目カササギヒタキ科
 埼玉県(2018) EN 環境省(2014) -

〔和名〕 **サンコウチョウ (繁)**

〔学名〕 *Terpsiphone atrocaudata* (Eyton)

指定状況 -

【形態】 全長オス44.5cm、メス17.5cm。オスは頭部が黒く冠羽があり目の周囲が青い。上面は紫褐色で黒い尾は極端に長い。メスはオスに比べて色彩が鈍く尾は短い。

【国内分布】 夏鳥として本州以南に渡来して繁殖する。

【主な生息環境】 平地から低山の針葉樹が混じる暗い林で、近くに川があるところを好んで営巣する。

【県内での生息状況】 以前は低地帯から丘陵・台地帯、山地帯に普通に生息していたが、1980年代以降急激に数を減らした。現在は低地帯では見られなくなり、主に丘陵帯から低山帯で繁殖している。嵐山町、寄居町、小川町、入間市、飯能市、日高市等で繁殖期の記録があるが多くない。春秋の移動時期には低地帯の林でも見られる。

【特記事項】 鳴き声が「ツキヒホシ(月日星)ホイホイホイ」と聞こえることから、「三光鳥」と名付けられた。写真撮影など人為的なストレスが本種の生存を脅かす一因となっている。

〔目名・科名〕 スズメ目ヨシキリ科
 埼玉県(2018) EN 環境省(2014) -

〔和名〕 **コヨシキリ (繁)**

〔学名〕 *Acrocephalus bistrigiceps* Swinhoe

指定状況 -

【形態】 全長12.5～13.5cm。オオヨシキリに比べてかなり小さい。全体が茶褐色で下面が白い。白い眉斑の上に黒い縁取りの線がある。鳴き声はオオヨシキリのように濁った声ではなく、やや透き通った高い声である。

【国内分布】 夏鳥として九州以北に渡来して繁殖する。

【主な生息環境】 高原で繁殖するものが一般的であるが、北方のものほど低標高の草原で繁殖する。

【県内での生息状況】 県内では、低地帯から台地・丘陵帯のヨシ原で繁殖記録が点在しているが、オオヨシキリに比べ、非常に局所的であり、現在の記録は極めて少ない。1960年代までは、越谷市、草加市等の県東部低湿地では普通に繁殖していたとの記録もある。

【特記事項】 渡良瀬遊水地では多数のコヨシキリが繁殖しているが、オオヨシキリに比べて繁殖場所は局地的である。さえずりが聞かれる期間は8月までとオオヨシキリよりも遅くまで鳴いている。

【目名・科名】	スズメ目ヒタキ科	埼玉県(2018)	EN	環境省(2014)	-
【和名】	コサメビタキ (繁)				
【学名】	<i>Muscicapa dauurica</i> Pallas	指定状況	-		
【形態】	全長13cm。体の上面は淡い灰褐色で、下面はほぼ白色でサメビタキの仲間の中では最も白い。				
【国内分布】	夏鳥として渡来し、九州以北の平地から山地で繁殖する。				
【主な生息環境】	平地から標高1,000mくらいまでの落葉広葉樹林に生息する。大木の混じった成熟度の高い落葉広葉樹林にすみ、地上3～6mほどの高さの横枝に巣をつくる。樹冠部の空間で、飛んでいる昆虫を捕るが、高い枝に留まり、昆虫が飛んでくると、飛び立って捕らえる。				
【県内での生息状況】	かつては草加市、熊谷市、北本市、東松山市などの低地帯の林でも繁殖していたが、1970年ころから減少が著しく、現在は低地帯での繁殖は見られない。台地・丘陵帯での繁殖も極めて局所的であり、かつて繁殖していた狭山丘陵での繁殖も現在は確認されていない。2013年には飯能市の山林で繁殖が記録されているが、他に確かな繁殖記録は見られない。				
【特記事項】	秋の渡り時期に低地の公園等でよく見られるが、サメビタキとの区別がやや難しい。				

【目名・科名】	キジ目キジ科	埼玉県(2018)	VU	環境省(2014)	-
【和名】	ヤマドリ (繁 VU・越 VU)				
【学名】	<i>Syrnaticus soemmerringii</i> (Temminck)	指定状況	-		
【形態】	全長 オス 125cm メス 55cm。全身が赤褐色で、オスの尾は非常に長く黒と赤褐色の横縞がある。				
【国内分布】	留鳥として本州、四国、九州に分布する。日本固有種。				
【主な生息環境】	低山から山地の山林に生息する。				
【県内での生息状況】	県内では留鳥として、低山帯から山地帯の山林に生息する。キジが疎林や河原、農耕地、草地など開けた環境に生息するのに対し、本種はよく茂った山林を好む。現在はニホンジカの採食影響などに伴う生息環境の悪化により減少傾向にある。キジに比べ、個体数は著しく少ない。				
【特記事項】	狩猟対象種であるが、埼玉県では現在放鳥は行われていない。				

【目名・科名】	カモ目カモ科	埼玉県(2018)	VU	環境省(2014)	VU
【和名】	トモエガモ (越)				
【学名】	<i>Anas formosa</i> Georgi	指定状況	-		
【形態】	全長39～43cm、翼開長65～75cm。オスは顔に淡黄色、緑色、黒色から成る巴字形の模様がある。体上面は褐色で、肩羽が脇にかかるほど長い。下尾筒に三角形の黒斑がある。メスは全体が褐色で、黒褐色の斑が体中にある。				
【国内分布】	冬鳥として全国に渡来するが本州以南の日本海側に多く、太平洋岸では少ない。				
【主な生息環境】	湖沼、河川、海岸などに生息するが、淡水を好み、水辺の草地などで種子を食べる。日本全体としての個体数は少ない。				
【県内での生息状況】	県内には冬鳥として、低地帯から台地・丘陵帯の河川・湖沼に渡来するが少ない。1羽から数羽がカルガモ、オナガガモ、コガモなど他のカモの群れに混じることが多い。				
【特記事項】	全国的にみると、1982年度以前は現在より記録が多かった。その後は3000羽前後で推移していたが、2007年度は例外的に1万羽を超えた。2015年度は約2000羽である。				

【目名・科名】	カイツブリ目カイツブリ科	埼玉県(2018)	VU	環境省(2014)	-
【和名】	アカエリカイツブリ (越)				
【学名】	<i>Podiceps grisegena</i> (Boddaert)	指定状況	-		
【形態】	全長40～50cm、翼開長77～85cm。冬羽は全体が暗褐色で、下面は淡い。嘴は基部がとがって黄色。夏羽は頭が黒く、顔が白い。首は赤褐色。				
【国内分布】	北海道で繁殖し、本州以南では冬鳥として渡来する。				
【主な生息環境】	冬季は内海、港湾、河口の海上に多い。大きな湖沼などにも生息する。				
【県内での生息状況】	県内には冬鳥として、利根川、荒川、狭山湖、彩湖(戸田市)など限られた場所に稀に渡来する。カンムリカイツブリに比べて渡来数は少ない。				
【特記事項】	他県ランク：東京都区部・北多摩 NT				

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

魚類・円口類

昆虫類

甲殻類

多足類

クモ目

軟体動物

扁形動物

【目名・科名】 カイツブリ目カイツブリ科

【和名】 **カンムリカイツブリ (越)**

【学名】 *Podiceps cristatus* (Linnaeus)

埼玉県(2018) VU 環境省(2014) -

指定状況 -

【形態】 全長46～61cm、翼開長85～90cm。首は長く長い。冬羽では頭、体の上面が黒く、顔、首、体の下面は白い。嘴はピンク色。夏羽では顔に赤褐色と黒色の扇状に広がる飾り羽が出る。

【国内分布】 主に冬鳥として本州、四国、九州に渡来するが、本州北部（青森県、秋田県）や琵琶湖などで少数が繁殖する。

【主な生息環境】 内湾、河口、大河川の河口堰、大きな湖沼で越冬する。潜水して魚類、甲殻類、昆虫類などを食べる。

【県内での生息状況】 県内には冬鳥として渡来し、利根川、荒川、狭山湖、彩湖（戸田市）、大相模調節池（越谷市）など低地帯や台地・丘陵帯の河川や湖沼で越冬する。狭山湖では以前から100羽以上の群れが見られ、関東地方有数の越冬地として知られている。彩湖では増加傾向にあり、個体数の記録が残っている2006年は2月の72羽が最大であったが、2016年2月には224羽が確認されている。

【特記事項】 国内ではかつて稀な冬鳥であったが、徐々に飛来数が増加し1972年に青森で繁殖確認され、その後越冬個体数は増加傾向にある。福川（利根川との合流部）では、2013年に越冬記録がある。

【目名・科名】 ペリカン目サギ科

【和名】 **ヨシゴイ (繁)**

【学名】 *Ixobrychus sinensis* (Gmelin)

埼玉県(2018) VU 環境省(2014) NT

指定状況 -

【形態】 全長31～38cm、翼開長53cm。ゴイサギに比べるとかなり小さい小型のサギである。上面は茶褐色で、下面は黄白色。オスは頭上が暗色となる。飛翔時、黒い風切り羽がよく目立つ。

【国内分布】 夏鳥として北海道、本州、四国、九州に渡来し繁殖する。本州中部以南で越冬するものもある。

【主な生息環境】 ヨシやガマが茂る湖沼、河川周辺、耕作放棄地などで普通に見られていたが、現在は数を減らしている。遊水池や人工の調節池などでも繁殖する。

【県内での生息状況】 県内には夏鳥として渡来し、河川や湖沼で見られるが県内での渡来地は多くない。現在、繁殖地が減少し、観察記録も激減している。河川や湖沼の改修、湿地埋め立てなどが原因と思われる。湿性植物がよく茂る芝川第一調節池（さいたま市）、彩湖（戸田市）、旧忍川（行田市）、大相模調節池（越谷市）、伊佐沼（川越市）などでは比較的良好に観察される。

【特記事項】 外敵等に出会い驚くと体をまっすぐに伸ばし、周辺のヨシやガマに似せた擬態をする

【目名・科名】 ペリカン目サギ科

【和名】 **チュウサギ (繁)**

【学名】 *Egretta intermedia* (Wagler)

埼玉県(2018) VU 環境省(2014) NT

指定状況 -

【形態】 全長65～72cm、翼開長105～115cm。全身が白色でコサギよりも大きい。嘴は短めで足指は黒い。夏羽では嘴が黒く背と胸に飾り羽がある。冬羽では嘴が黄色となる。

【国内分布】 夏鳥として日本に渡来し本州、中国、四国で繁殖する。九州南部、南西諸島では越冬するものもある。

【主な生息環境】 水田、河川、池沼、干潟等の水辺に棲む。稲刈り時にコンバインの後ろにつき、飛び出したカエルやバッタなどを捕えている姿がよく見られる。ダイサギ、コサギ、アマサギ、ゴイサギ、などと一緒にコロニーを作り営巣している。

【県内での生息状況】 かつて、サギ類のコロニーとして国指定の天然記念物「野田（旧浦和市）の鷺山」があったが1972年になくなった。現在、コロニーは久喜市、東松山市、越谷市等数ヶ所が知られており、チュウサギはそれらコロニーの主要構成種として繁殖している。従前知られていた花園町のコロニーは営巣木が伐採されなくなった。また鴻巣市の小規模なコロニーも2016年には繁殖が見られなくなった。秋の渡り期（8月～10月）には、南方への渡り途中の群れが水田で採餌する姿をよく見る。

【特記事項】 越谷市中島のコロニーの記録ではチュウサギが最多で、ダイサギ、コサギ、ゴイサギ、アマサギと続いている。繁殖期後、ねぐらを形成して他のサギと共に集団で夜を過ごす。

【目名・科名】 ツル目クイナ科	埼玉県(2018)	VU	環境省(2014)	-
〔和名〕 クイナ (越)				
【学名】 <i>Rallus aquaticus</i> Linnaeus	指定状況			-
【形態】	全長28～29cm、翼開長38～45cm。上面が褐色で黒い縦斑がある、顔から胸は青灰色、腹には黒の縞模様がある。嘴は長く冬は黒いが繁殖期には赤くなる。			
【国内分布】	北海道から本州北部では夏鳥として繁殖し、本州中部以南に冬鳥として渡来する。			
【主な生息環境】	湖沼や河畔などの水辺や湿地に生息する。			
【県内での生息状況】	県内には、低地帯から台地・丘陵帯の湖沼や河川、休耕田、ヨシ原などの湿地に冬鳥として渡来する。現在は湿地の埋め立て等により生息適地が減ったことから減少傾向にある。旧忍川(行田市)のヨシ原では繁殖期にあたる時期(2015年5月～7月)の観察記録がある。			
【特記事項】	物音に敏感で、警戒心が強く、あまりヨシ原などから出てこないため姿を見るのが難しい。			

【目名・科名】 ヨタカ目タカ科	埼玉県(2018)	VU	環境省(2014)	NT
〔和名〕 ヨタカ (繁)				
【学名】 <i>Caprimulgus indicus</i> Latham	指定状況			-
【形態】	全長29cm。翼は細長く尾も長い。全身褐色で、黒褐色・灰褐色・赤褐色の細かい斑がある。			
【国内分布】	夏鳥として北海道、本州、四国、九州に生息する。			
【主な生息環境】	平地から山地の林、伐採地、若い植林地、草原などの開けた環境に生息する。			
【県内での生息状況】	県内には夏鳥として渡来し、低山帯から亜高山帯のやや開けた山林などに生息し、繁殖しているが、個体数は減少傾向にある。かつては台地や丘陵地などの低標高地にも生息していたが、現在は繁殖の情報が無い。春秋期の通過時には低地の緑地でも時々観察される。			
【特記事項】	夜行性の鳥で、繁殖期に「キョッキョッキョッ・・・」と特徴のある声で鳴く。			

【目名・科名】 アマツバメ目アマツバメ科	埼玉県(2018)	VU	環境省(2014)	-
〔和名〕 ヒメアマツバメ (繁 LP・越 VU)				
【学名】 <i>Apus nipalensis</i> (Hodgson)	指定状況			-
【形態】	全長13cm、翼開長28cm。ツバメより小さい。体色は黒褐色で喉と腰が白い。翼はイワツバメに似るが細く、尾は浅い凹尾。			
【国内分布】	1967年に静岡県で初めて繁殖が確認された。以来分布を拡大し、現在は関東地方以西の太平洋岸に局所的に分布する。			
【主な生息環境】	市街地に分布し、建造物につくった巣で繁殖し、ねぐらとしている。コシアカツバメやイワツバメの巣を利用することが多い。日中はねぐらの周りや近くの山の頂上や川の上など広範囲に飛びまわって、飛んでいる虫をとる。			
【県内での生息状況】	県内では1979年12月に入間市役所庁舎においてねぐらが発見されて以来、安定的な繁殖地として知られている。現在、繁殖地が周辺に分散しており拡大傾向にある。越冬期も入間市を中心として、狭山市、坂戸市、日高市、東松山市、富士見市、三郷市等で見られている。荒川(熊谷市)でも観察記録が多い。県内では留鳥として生息するが局所的である。			
【特記事項】	高速道路や鉄道の橋脚での繁殖や越冬が確認されている。			

【目名・科名】 チドリ目シギ科	埼玉県(2018)	VU	環境省(2014)	-
〔和名〕 ヤマシギ (越)				
【学名】 <i>Scolopax rusticola</i> Linnaeus	指定状況			-
【形態】	全長33～35cm、翼開長56～60cm。体は丸味を帯び嘴は長い。全身茶褐色で黒褐色の斑がある。			
【国内分布】	北海道、東北北部で夏鳥、伊豆諸島で繁殖し、東北南部以南、四国、九州、南西諸島では冬鳥。			
【主な生息環境】	林、谷津田、水田、畑、草地、湿地、河川などに生息する。			
【県内での生息状況】	県内には冬鳥として渡来する。近くに湿地や河川、湖沼、水田、草地などのある雑木林などで時々観察されるが、元々多い鳥ではない。現在は湿地の埋め立て等により生息適地が減ったことから減少傾向にある。			
【特記事項】	他のシギ類と異なり、林に生息するため姿を見るのが難しい種である。			

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

魚類・円口類

昆虫類

甲殻類

多足類

クモ目

軟体動物

扁形動物

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
魚類・甲殻類
昆虫類
甲殻類
多足類
クモ目
軟体動物
扁形動物

〔目名・科名〕 チドリ目シギ科
 埼玉県(2018) VU 環境省(2014) -
 〔和名〕 **イソシギ (繁)**
 〔学名〕 *Actitis hypoleucos* (Linnaeus) 指定状況 -
 【形態】 全長 19～21cm、翼開長 38～41cm。頭部から上面は褐色で下面は白い。胸の脇から翼の付け根に白い部分が食い込んでいる。
 【国内分布】 北海道から九州で繁殖。中部地方以北では夏鳥、他の地方では留鳥。
 【主な生息環境】 河川、湖沼、海岸、干潟、河口などに生息する。
 【県内での生息状況】 河川や湖沼などに留鳥として生息する。利根川や荒川などで繁殖するが、現在は夏季の生息数が減少し、繁殖地は局所的となっている。春秋の渡り期には休耕田にも飛来する
 【特記事項】 尾を上下によく降る。翼を震わせるような飛び方で「チリーリーリー」と高い声で鳴く。

〔目名・科名〕 タカ目タカ科
 埼玉県(2018) VU 環境省(2014) NT
 〔和名〕 **オオタカ (繁 VU・越 VU)**
 〔学名〕 *Accipiter gentilis* (Linnaeus) 指定状況 -
 【形態】 全長 オス 50cm メス 58.5cm、翼開長 105～130cm。オスは頭上から上面が暗青灰色。眉斑は白く明瞭で虹彩はオレンジ色。下面は白く黒褐色の細かい横縞がある。メスでは褐色味が強く虹彩は黄色い。幼鳥では全身が褐色で下面には縦斑がある。
 【国内分布】 留鳥として北海道、本州、四国、九州に分布し、南西諸島では冬鳥。
 【主な生息環境】 平地から山地の林や農耕地などに生息する。現在は市街地のさほど大きくない林で営巣するものもある。
 【県内での生息状況】 留鳥として平地から山地の林や農耕地、河川敷などに生息する。かつて、低地帯では冬季でも生息数が少なかったが、現在は低地帯の社寺林や屋敷林などで営巣するものが増えていて、個体数は増加傾向にあるようだが、生息地の環境は必ずしも良くなっていない。
 【特記事項】 第3次及び第4次環境省レッドリストで準絶滅危惧種となったことから、2017年9月に種の保存法に基づく国内希少野生動植物種の指定が解除された。一方、生態系の頂点に位置する種であることから、生態系保全の指標として保護対策が推進されている。

〔目名・科名〕 フクロウ目フクロウ科
 埼玉県(2018) VU 環境省(2014) -
 〔和名〕 **コノハズク (繁)**
 〔学名〕 *Otus sunia* (Hodgson) 指定状況 -
 【形態】 全長 18～21cm。全身が灰褐色の灰色型と赤褐色の赤色型がある。虹彩は黄色。
 【国内分布】 夏鳥として、北海道、本州、四国、九州に渡来する。
 【主な生息環境】 山地のよく茂った深い森に生息する。北海道から東北北部では平地の林や果樹園でも繁殖する。
 【県内での生息状況】 山地帯から亜高山帯までの山地に夏鳥として渡来する。かつては、雲取山、両神山、三峰山、和名倉山、熊倉山、西谷山など深い森林地帯に普通に生息していたが、現在は、ニホンジカによる採食影響のために生息環境が悪化したことにより個体数の減少が著しい。両神山では個体数は減ったが現在も初夏に鳴き声を聞くことができる。
 【特記事項】 鳴き声が「ブッポウソウ」と聞こえることから、声の「仏法僧」といわれている。

〔目名・科名〕 フクロウ目フクロウ科
 埼玉県(2018) VU 環境省(2014) -
 〔和名〕 **コミミズク (越)**
 〔学名〕 *Asio flammeus* (Pontoppidan) 指定状況 -
 【形態】 全長 37～39cm、翼開長 95～110cm。短い耳羽(耳のように見える羽)がある。虹彩が黄色いことから類似種のトラフズクと区別できる。
 【国内分布】 冬鳥として全国に渡来する。
 【主な生息環境】 農耕地、河川敷、埋め立て地等水辺の草原や湿地で単独または少数の群れで越冬する。
 【県内での生息状況】 県内には冬鳥として渡来し、利根川、荒川等の河川敷、遊水地や広い休耕田等で越冬する。利根川、福川、荒川、芝川第一調節池(さいたま市)、吉見運動公園、鴻巣市等で記録がある。
 【特記事項】 夜行性であるが昼間に活動することもあり、杭の上などによくとまる。

【目名・科名】	ハヤブサ目ハヤブサ科	埼玉県(2018)	VU	環境省(2014)	VU
【和名】	ハヤブサ (越)				
【学名】	<i>Falco peregrinus</i> Tunstall	指定状況		国内希少野生動物種	
【形態】	全長 オス 38～45cm メス 46～51cm、翼開長 84～120cm。上面は青灰黒色で下面は白く黒褐色の横縞がある。頬に特徴的なひげ状の黒斑がある。幼鳥ではい面が褐色で、下面には黒い縦斑がある。				
【国内分布】	留鳥として、北海道から九州で繁殖し、冬季は冬鳥として全国に渡来する。				
【主な生息環境】	平地から山地の海岸、河口、河川敷、湖沼、農耕地などに生息する。元来、海岸の断崖や岸壁の岩棚などで繁殖していたが、現在は市街地のビルや橋脚など人工構造物に営巣する例が増加している。				
【県内での生息状況】	県内には冬鳥として渡来し、平地から山地の河川敷、農耕地、湖沼、ダム湖などに生息する。現在はやや増加傾向にあり、夏季の観察記録もある。県内でも人工構造物に営巣し、繁殖する兆候がある。				
【特記事項】	低地では鉄塔などの高い所にとまっているところが見られる。餌を発見すると飛び出し、捕まえた獲物を元の場所に運んで食べるが多い。				

【目名・科名】	スズメ目アトリ科	埼玉県(2018)	VU	環境省(2014)	-
【和名】	ハギマシコ (越)				
【学名】	<i>Leucosticte arctoa</i> (Pallas)	指定状況		-	
【形態】	全長 16cm。オスは額から頭頂は銀灰色、後頭は黄褐色で、えりは黄白色。腰は褐色で淡紅色を帯びる。メスは色がにぶく、褐色みが強い。				
【国内分布】	冬鳥として北海道や本州中部以北の山地や海岸のがけ地、農耕地、草原等に渡来する。				
【主な生息環境】	北海道の大雪山や利尻岳などの高山で夏の記録がある。冬季の生息場所は海岸から山地の草地・河川敷・がけ・岩場などである。				
【県内での生息状況】	県内には冬鳥として渡来するが飛来数は少ない。冬季に旧大滝村(秩父市)の霧藻ヶ峰、雲取山、旧名栗村(飯能市)の有間ダム、棒ノ嶺などがけ地等で少数の記録がある。狭山湖や荒川河川敷(さいたま市)などでも記録されたことがある。				
【特記事項】	他県ランク：群馬県 DD、千葉県 VU、東京都南多摩 DD、西多摩 NT				

【目名・科名】	スズメ目ホオジロ科	埼玉県(2018)	VU	環境省(2014)	VU
【和名】	コジュリン (越)				
【学名】	<i>Emberiza yessoensis</i> (Swinhoe)	指定状況		-	
【形態】	全長 14.5cm。ホオジロより小さい。夏羽のオスは頭部全体が黒く、よく似たオオジュリンは白い頬線があることで区別できる。冬羽やメスでは上面の縦斑が明瞭である。				
【国内分布】	留鳥あるいは漂鳥として九州、本州で繁殖するが局所的である。				
【主な生息環境】	河川敷、田の畔、草丈の低い休耕田等で越冬することが多い。普通、数個体の群れが見られる。				
【県内での生息状況】	県内には冬鳥として少数が渡来していると思われるが、草原内に生息しているため詳細はよくわかっていない。荒川河川敷、利根川河川敷、見沼田圃、草加市、さいたま市、蓮田市、北本市などの休耕田や草地で確認されている。				
【特記事項】	茨城県稲敷では継続的に繁殖が確認されている。				

【目名・科名】	カモ目カモ科	埼玉県(2018)	NT1	環境省(2014)	-
【和名】	コハクチョウ (越)				
【学名】	<i>Cygnus columbianus</i> (Ord)	指定状況		-	
【形態】	全長 115～150cm、翼開長 180～225cm。オオハクチョウより小型で嘴の基部は黄色で先端は黒い。この黒色部が嘴全体の半分以上をしめる。幼鳥は全身が淡灰褐色で嘴基部はピンク色である。				
【国内分布】	九州以北に冬鳥として渡来する。				
【主な生息環境】	湖沼、内湾、農耕地、河川など				
【県内での生息状況】	県内では、荒川、越辺川、利根川などに冬鳥として渡来するが、飛来地は局所的である。旧川本町(深谷市)の荒川では2012年まで餌付けが行われ、毎年200羽を超えるコハクチョウが渡来していた。餌付け中止後は渡来数は激減している。川島町の越辺川でも100羽を超える数が見られている。				
【特記事項】	各地でハクチョウ類に対する餌付けが行われていたが、鳥インフルエンザや生態系への影響を考慮して餌付けを取り止めたところが多い。このため、越冬数には変化が見られる。				

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

魚類・円口類

昆虫類

甲殻類

多足類

クモ目

軟体動物

扁形動物

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
魚類・円口類
昆虫類
甲殻類
多足類
クモ目
軟体動物
扁形動物

【目名・科名】 カイツブリ目カイツブリ科
 【和名】 **ハジロカイツブリ (越)**
 【学名】 *Podiceps nigricollis* Brehm
 埼玉県(2018) NT1 環境省(2014) -
 指定状況 -

【形態】 全長 28～34cm、翼開長 56～60cm。嘴は黒く短く、やや上に反る。冬羽では目の後方に白い縦長の斑がある。夏羽では目の後方に三角形状に広がる金色の飾り羽ができる。

【国内分布】 冬鳥として全国に渡来する。

【主な生息環境】 秋冬には河口、内湾などにいるが、ときには海岸に近い池や広い川などにもいることもある。ミミカイツブリよりも波のあまりたたない開水面を好み、より大きな群れを形成する傾向がある。

【県内での生息状況】 県内には冬鳥として渡来し、利根川、荒川、狭山湖、彩湖（戸田市）、大相模調節池（越谷市）、渡良瀬遊水地など低地帯や台地・丘陵帯の河川や湖沼で少数が越冬するが、近年増加傾向にある。

【特記事項】 日本野鳥の会埼玉の30年間の記録「5年間毎出現率」でも、1984年～1988年の1.1%から2009年～2013年の7.7%に増加している。

【目名・科名】 ツル目クイナ科
 【和名】 **オオバン (繁)**
 【学名】 *Fulica atra* Linnaeus
 埼玉県(2018) NT1 環境省(2014) -
 指定状況 -

【形態】 全長 36～39cm、翼開長 70～80cm。全身黒色で嘴から額が白い。足には水かきがある。

【国内分布】 主に本州中部以北で繁殖し、冬は暖地に移動する

【主な生息環境】 湿性植物がよく茂る河川や湖沼に生息するが、広い水面のある環境を好む。

【県内での生息状況】 かつては飛来数は多くはなかったが、現在では越冬する個体数が増加傾向で、普通に見られるようになった。山間のダム湖や溜池にも生息する。彩湖（戸田市）や芝川第一調節池（さいたま市）、福川（行田市）、利根大堰上流部（行田市）などでは繁殖が確認されている。

【特記事項】 バンとは異なり、潜水して水草などを採ることも多い。

【目名・科名】 チドリ目チドリ科
 【和名】 **イカルチドリ (繁)**
 【学名】 *Charadrius placidus* Gray & Gray
 埼玉県(2018) NT1 環境省(2014) -
 指定状況 -

【形態】 全長 19～21cm、翼開長 45cm。コチドリによく似るが本種の方が大きくて嘴は長めである。額は白く頭部から上面は灰褐色で下面は白い。目の縁は淡黄色で。

【国内分布】 九州以北では留鳥、北海道では夏鳥（一部留鳥）、南西諸島では冬鳥。

【主な生息環境】 砂礫地のある河川や湖沼で繁殖する。河川では上流から中流域に生息する。繁殖期以外の季節には休耕田や下流域にも出現するが、海岸や干潟に出ることは少ない。

【県内での生息状況】 県内では荒川や利根川、入間川などの砂礫河原に留鳥として生息し、繁殖している。荒川では、上流の三峰口付近（秩父市）から下流の大芦橋付近（鴻巣市）の区間で繁殖している。現在は砂礫河原の草地化、林地化による生息環境の悪化により個体数は減少傾向にある。春秋の渡り期や冬季には休耕田や河川の下流域にも飛来する。

【特記事項】 コチドリは造成地や駐車場の砂利地でも営巣するが、本種はそのような人工環境で繁殖することはほとんどない。コチドリによく似るが、飛び立つと翼に白い線がでる。また、動きがやや緩慢である。繁殖地へのオフロード車の進入は繁殖に大きな脅威となっている。

【目名・科名】 キツツキ目キツツキ科
 【和名】 **オオアカゲラ (繁)**
 【学名】 *Dendrocopos leucotos* (Bechstein)
 埼玉県(2018) NT1 環境省(2014) -
 指定状況 -

【形態】 全長 28cm。オスは頭頂から後頭にかけて赤い。上面は黒く白い斑がある。下面は黒く黒い横縞があり、下腹部は赤い。メスの頭頂部は赤くない。

【国内分布】 留鳥として、北海道、本州、四国、九州、奄美大島に分布する。

【主な生息環境】 平地から山地の林に生息する。

【県内での生息状況】 山地帯から亜高山帯の山林に留鳥として生息し、繁殖している。アカゲラよりやや標高の高い山地に生息する傾向がある。山地帯から亜高山帯では現在も稀な鳥ではない。冬季には低地の林にも漂行してくることもあるが多くない。

【特記事項】 生息状況に大きな変化はないと思われる。

【目名・科名】	スズメ目ヒタキ科	埼玉県(2017)	NT1	環境省(2014)	-
【和名】	コマドリ (繁)				
【学名】	<i>Luscinia akahige</i> (Temminck)	指定状況	-		
【形態】	全長14cm。オスは胸と頭部が赤橙色、上面は赤橙褐色、下面は黒灰色。メスでは全体に色が淡い。				
【国内分布】	夏鳥として、北海道、本州、四国、九州渡来し、伊豆諸島、大隅諸島に留鳥として分布する。				
【主な生息環境】	山地帯から亜高山帯のササの茂った林内で繁殖する。				
【県内での生息状況】	県内には、山地帯上部から亜高山帯に夏鳥として渡来し、繁殖する。雲取山、西谷山、雁坂峠、和名倉山、甲武信ヶ岳、熊倉山などの標高の高い山地に生息しているが、現在はニホンジカの採食影響などに伴い生息環境が悪化し、減少傾向が著しい。				
【特記事項】	「ヒン、カラカラカラ」と馬のいななきのような声で鳴くことから名付けられた。				

【目名・科名】	スズメ目ヒタキ科	埼玉県(2018)	NT1	環境省(2014)	-
【和名】	コルリ (繁)				
【学名】	<i>Luscinia cyane</i> (Pallas)	指定状況	-		
【形態】	全長14cm。オスでは上面が暗青色で下面は白い。メスでは全身オリーブ褐色。				
【国内分布】	夏鳥として、北海道から本州中部に渡来する。				
【主な生息環境】	ササなどの下生えのある落葉広葉樹林や針広混交林に生息する。				
【県内での生息状況】	県内には、低山帯から亜高山帯の山地に夏鳥として渡来し、繁殖する。現在はニホンジカの採食影響により下層植生がなくなり、減少傾向が著しい。春の渡り期には低地も通過し、屋敷林や公園の緑地でさえずりを聞くことがある。				
【特記事項】	コマドリによく似た鳴き声をするが、よく聞くと「チチチチ・・・」という前奏がある。				

【目名・科名】	スズメ目イワヒバリ科	埼玉県(2018)	NT1	環境省(2014)	-
【和名】	イワヒバリ (繁)				
【学名】	<i>Prunella collaris</i> (Scopoli)	指定状況	-		
【形態】	全長17～19cm。胸と頭部は暗灰色、背は灰褐色で黒い斑がある。腹面は栗茶色。				
【国内分布】	留鳥または漂鳥として、本州の高山帯に生息する。冬季は低山に移動して越冬する。				
【主な生息環境】	高山の岩礫帯、ハイマツ帯、草地に生息するが、冬季は低山の岩場や崖地、河原などで越冬する。				
【県内での生息状況】	県内には、高山帯に当たる地域がないので本種の生息記録は少ない。埼玉県最高峰の三宝山(標高2,483m)では夏季の生息が確認されていたが、現在は夏季の生息情報が無い。冬季には三峰山や名栗湖などの低山に漂行するものもあるが、現在は観察記録が減少している。				
【特記事項】	メスがオスに求愛するという比較的珍しい繁殖形態をとる。				

【目名・科名】	スズメ目スズメ科	埼玉県(2018)	NT1	環境省(2014)	-
【和名】	ニュウナイスズメ (越)				
【学名】	<i>Passer rutilans</i> (Temminck)	指定状況	-		
【形態】	全長約14cm。スズメより少し小さい。オスは頭部から上面が栗色で、背に黒い縦斑がある。喉は黒く下面は汚白色。メスは上面が灰褐色で、淡黄色の眉斑がある。				
【国内分布】	本州中部以北で繁殖し、冬は本州太平洋岸、四国、九州で越冬する漂鳥。				
【主な生息環境】	繁殖地では平地から山地の林、山間の集落、農耕地、草地などに生息する。冬季は低地の林、屋敷林、農耕地、ヨシ原などに生息する。				
【県内での生息状況】	県内には冬鳥として渡来するが、飛来地は局所的である。行田市、鴻巣市、久喜市(旧菖蒲町)付近の水田地帯には飛来数の多い場所がある。スズメと違い市街地や住宅地には生息せず、広い水田地帯の中にある集落やヨシ原などの周辺に群れて生活していることが多い。				
【特記事項】	日光の戦場ヶ原等で夏季によく見られる。				

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

魚類・円口類

昆虫類

甲殻類

多足類

クモ目

軟体動物

扁形動物

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
魚類・円口類
昆虫類
甲殻類
多足類
クモ目
軟体動物
扁形動物

【目名・科名】 スズメ目ホオジロ科
 埼玉県(2018) NT1 環境省(2014) -

【和名】 **ミヤマホオジロ (越)**

【学名】 *Emberiza elegans* Temminck
 指定状況 -

【形態】 全長 15.5cm。後頭部に冠羽がある。オスは頭上、眼先、胸が黒く上面は栗色で腰は灰色。喉と眉斑は黄色く、下面は白い。メスでは黒色部が褐色で眉斑の黄色は薄い。

【国内分布】 冬鳥として全国に渡来するが、西日本で渡来数が多く、北海道や東日本では少ない。広島県と長崎県対馬で繁殖記録がある。

【主な生息環境】 平地から低山の林、農耕地、草地などに生息する。

【県内での生息状況】 冬鳥として渡来し、低地帯から山地帯の林などに生息するが数は多くない。現在は観察記録がやや増加傾向にある。

【特記事項】 カシラダカとよく見間違えられるが、本種の眉斑は嘴まで達している。

【目名・科名】 ペリカン目サギ科
 埼玉県(2018) NT2 環境省(2014) -

【和名】 **コサギ (繁)**

【学名】 *Egretta garzetta* (Linnaeus)
 指定状況 -

【形態】 全長 55～65cm、翼開長 90～105cm。全身が白く、嘴が長めで趾が黄色いサギである。夏羽では白い冠羽があり飾り羽が見られる。嘴は一年中黒い。水の中で足を小刻みに震わせ、餌を追い出して捕らえる姿が見られる。

【国内分布】 留鳥で本州、四国、九州で繁殖し全国で記録がある。2015年に沖縄県で繁殖したという情報がある。

【主な生息環境】 水田、河川、湖沼、干潟、湿地で見られ主に小魚を捕る。

【県内での生息状況】 通年、県内各地の水田、河川、湖沼、湿地で見られるが、最近著しく減少している。オオクチバスやカワウなどが小魚を捕食することから、本種の餌資源の減少が原因のひとつとして指摘されている。

【特記事項】 シラサギといわれる白いサギの中で通年見られる代表的な種であったが、現在ではダイサギやチュウサギに比べて観察される個体数が減少している。近県でもレッドリストに含まれるようになった。
 近県ランク：栃木県 NT、群馬県 DD、千葉県 VU、東京都区部 VU

【目名・科名】 ツル目クイナ科
 埼玉県(2018) NT2 環境省(2014) -

【和名】 **バン (繁)**

【学名】 *Gallinula chloropus* (Linnaeus)
 指定状況 -

【形態】 全長 30～38cm、翼開長 50～55cm。ハトより大きく全身黒色で夏は嘴から額が赤色になる。嘴の先端は黄色い。脇に白斑があり下尾筒は白色で後ろから見るとよく目立つ。

【国内分布】 留鳥として、全国に分布するが、北海道のものは冬に南へ移動する。

【主な生息環境】 河川、休耕田、池沼などのヨシ原に生息する。水かきはないが水面をよく泳ぎ時々足をだらんと下げて飛ぶ姿も見られる。

【県内での生息状況】 低地帯を中心に繁殖しているが減少傾向にある。荒川以西の低地及び台地・丘陵帯においても少数の繁殖記録がある。

【特記事項】 巣立ちした雛が親の手助けをして、小さい雛の世話をするヘルパーの存在が知られている。

【目名・科名】 カッコウ目カッコウ科
 埼玉県(2018) NT2 環境省(2014) -

【和名】 **カッコウ (繁)**

【学名】 *Cuculus canorus* Linnaeus
 指定状況 -

【形態】 全長 33～36cm、翼開長 55～60cm。ハトより大きくて尾が長い。頭部、胸、上面は青灰色、下面は白く、黒く細い横縞があり一見猛禽類のように見える、これはカッコウ科の鳥に共通する。メスには赤色型がある。

【国内分布】 夏鳥として九州以北に渡来する。

【主な生息環境】 托卵相手のオオヨシキリ、モズ、オナガ、ホオジロ、ノビタキなどが繁殖する低地から山地にかけて幅広く生息する。住宅地のアンテナ上で鳴く姿を見ることもある。秋の渡りの時期には公園などの街路樹で毛虫を食べる姿が見られる。

【県内での生息状況】 県内には夏鳥として低山帯から台地・丘陵帯、低地帯に渡来するが、低山帯での生息数は多くない。現在はヨシ原や雑木林の減少等、生息環境の悪化による托卵相手（オオヨシキリ、モズ、オナガ、ホオジロなど）の減少に伴い県内全域で減っている。低地では宿主のオオヨシキリの減少以上に本種の減少傾向が著しい。

【特記事項】 近県でも減少傾向が続いており、越冬地の東南アジアでの森林伐採等の影響が考えられている。近県ランク：茨城県 EN、群馬県 NT、千葉県 VU、東京都北多摩 VU、神奈川県繁殖期 VU

【目名・科名】	チドリ目チドリ科	埼玉県(2018)	NT2	環境省(2014)	-
【和名】	タゲリ (越)				
【学名】	<i>Vanellus vanellus</i> (Linnaeus)	指定状況	-		
【形態】	全長28～31cm、翼開長82～87cm。胸と頭上は黒く後頭部には長い冠羽がある。背と翼は金属光沢のある緑色。腹面は白く下尾筒はオレンジ色。飛翔時、翼下面の白と風切りの黒がよく目立つ。				
【国内分布】	冬鳥として本州以南に渡来する。北陸地方、関東北部などで繁殖記録がある。				
【主な生息環境】	水田、谷津田、畑、河川、牧草地、干潟などに生息する。				
【県内での生息状況】	かつては冬鳥として県内各地の水田、河川、湖沼等に多く渡来していた。現在は圃場整備に伴い、冬季に水田の乾燥化が進んだこと、湿地の埋め立て、河川や湖沼の改修などにより生息環境が悪化したため減少傾向が著しい。荒川（下流域）や利根川の河川敷など渡来地が局所的になっている。				
【特記事項】	「ミュー、ミュー」と独特の声で鳴きながら、ふわふわとした特徴的な飛び方をする。				

【目名・科名】	タカ目タカ科	埼玉県(2018)	NT2	環境省(2014)	-
【和名】	ツミ (繁)				
【学名】	<i>Accipiter gularis</i> (Temminck & Schlegel)	指定状況	-		
【形態】	全長 オス27cm メス30cm、翼開長51～63cm。オスはヒヨドリくらいの大さで頭部から上面は暗灰青色。下面はオレンジ色。メスは少し大きく、上面が灰黒色で下面は白色で黒い横縞がある。				
【国内分布】	留鳥または夏鳥として北海道から南西諸島までに分布。				
【主な生息環境】	平地から山地の林、市街地の公園の林などで繁殖。				
【県内での生息状況】	低地帯から低山帯に留鳥として生息し、繁殖する。現在は大きな林よりも市街地の緑地や公園の林などの小さな緑地で営巣するものが多い。個体数は増加傾向にあるが、生息環境は必ずしも良くなっていない。春秋の渡りの時期には通過個体が県内各地で記録される。				
【特記事項】	カラスの空き巣などで繁殖することもある。また巣の周囲にオナガが営巣することが知られている。				

【目名・科名】	タカ目タカ科	埼玉県(2018)	NT2	環境省(2014)	NT
【和名】	ハイタカ (繁 DD・越 NT2)				
【学名】	<i>Accipiter nisus</i> (Linnaeus)	指定状況	-		
【形態】	全長 オス30～32.5cm メス37～40cm、翼開長60.5～79cm。オスの頭上から上面は暗青灰色。下面は白色で橙褐色の横縞がある、メスは上面が褐色味を帯びる。				
【国内分布】	北海道と本州の一部で繁殖し、冬季は全国に冬鳥として渡来する。				
【主な生息環境】	ツミよりやや標高の高い山地の林で繁殖し、冬季は平地から山地の林、農耕地、河川敷などに生息する。				
【県内での生息状況】	冬季は平地の林、農耕地、河川敷などに生息するが個体数は多くない。現在はやや増加傾向にある。県内でも夏季に山地に生息するが、繁殖の状況についてはよくわかっていない。春秋の渡りの時期には通過と思われる個体が県内各地で記録される。				
【特記事項】	オオタカとよく似ており、識別が難しい。本種オスの下面の橙褐色の線は区別点である。また、足の中指は長い。				

【目名・科名】	タカ目タカ科	埼玉県(2018)	NT2	環境省(2014)	-
【和名】	ノスリ (繁 NT2・越 NT2)				
【学名】	<i>Buteo buteo</i> (Linnaeus)	指定状況	-		
【形態】	全長オス50～53cm、メス53～60cm、翼開長122～137cm。カラスと同じくらいの大さ。頭から上面は褐色で下面には褐色の斑がある。翼は幅が広く下面は白いが風切り羽の元の部分に褐色の斑がある、また、下腹部にも褐色の幅広い斑がある。				
【国内分布】	四国以北で繁殖し、留鳥または漂鳥。				
【主な生息環境】	山地の森林や岩壁で繁殖するが、低地での繁殖確認が増えている。冬は農耕地、河川敷などの見通しのよい場所で見られる。				
【県内での生息状況】	台地・丘陵帯で繁殖している他、低地帯での営巣も確認されており動向が注目される。冬は低地帯の農耕地や河川敷などでよく見られるようになってきた。				
【特記事項】	主に、ネズミ、モグラなどの小型のほ乳類を餌とする。				

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
魚類・円口類
昆虫類
甲殻類
多足類
クモ目
軟体動物
扁形動物

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
魚類・円口類
昆虫類
甲殻類
多足類
クモ目
軟体動物
扁形動物

〔目名・科名〕 フクロウ目フクロウ科

〔和名〕 **フクロウ (繁 RT・越 NT2)**

〔学名〕 *Strix uralensis* Pallas

埼玉県(2018) NT2 環境省(2014) -

指定状況 -

【形態】 全長 50cm。カラスくらいの大きさのふっくらした体形で頭には耳羽がない。頭から上面は灰褐色で黒い斑がある。胸は白く褐色の縦斑がある、虹彩は暗褐色。

【国内分布】 九州以北で繁殖する留鳥。

【主な生息環境】 平地から山地の林に棲み大木の樹洞に営巣するが、オオタカのご巣や農家の納屋に産卵することもある。夜行性のため不明な点も多い。

【県内での生息状況】 県内の低地帯から亜高山帯で幅広く繁殖している。冬は低地へ漂行するものもいる。低地帯での繁殖記録は多くないものの、さいたま市、川口市、蓮田市、伊奈町、熊谷市等で確認されている。

【特記事項】 繁殖に適した大木が少なくなったため、大型の巣箱をかけると繁殖する事例が増えている。一方で、アライグマによる巣箱の乗っ取りなども起きている。また、写真撮影などの人為的なストレスが本種の生存を脅かす一因となっている。

〔目名・科名〕 フクロウ目フクロウ科

〔和名〕 **アオバズク (繁)**

〔学名〕 *Ninox scutulata* (Raffles)

埼玉県(2018) NT2 環境省(2014) -

指定状況 -

【形態】 全長 29cm。頭部から背、肩、腰、尾羽は黒褐色。体下面は白く、濃褐色の荒い縦斑がある。羽角がなく、虹彩は黄色。

【国内分布】 夏鳥として全国的に渡来する。青葉の季節に渡ってくるフクロウの意。南西諸島では留鳥。

【主な生息環境】 平地から山地の林に生息し、市街地の神社や寺の林にも普通にみられていたが、現在は記録が減少している。夜間に活動し、大型のが、セミ、コガネムシなどを主として捕らえるが、小鳥やネズミも捕る。

【県内での生息状況】 県内では低地帯から山地帯にかけて林に生息するが、多くは大木のある社寺林や屋敷林などで繁殖している。大木や林の伐採とともに餌となる昆虫類が減少し、現在は記録数が減っている。

【特記事項】 営巣木となる大径木をできるだけ保全することや、枯死、倒木などで営巣木が失われた場合には、巣箱をかけるなどの配慮が望ましい。写真撮影のために刺激を与えたことにより、営巣を放棄した事例もあるので、過度な干渉は慎むべきである。

〔目名・科名〕 プッポウソウ目カワセミ科

〔和名〕 **ヤマセミ (繁)**

〔学名〕 *Megaceryle lugubris* (Temminck)

埼玉県(2018) NT2 環境省(2014) -

指定状況 -

【形態】 全長 38cm。カワセミ科の中では最大で冠羽が目立つ。上面は白黒のまだら模様。下面は白く、オスは胸に黄褐色と黒の斑が、メスでは黒の斑がある。

【国内分布】 留鳥として北海道、本州、四国、九州に分布する。

【主な生息環境】 山間の溪流や湖沼、ダム湖などに生息する。

【県内での生息状況】 かつては、荒川や入間川の上流部、支流の中津川、赤平川、高麗川、都幾川、名栗川などに留鳥として普通に繁殖していたが、現在は個体数が著しく減少し、観察記録も少なくなっている。河川改修や川岸の道路建設、生息地付近の交通量の増加、カワウの影響等が考えられるが詳細は不明である。

【特記事項】 非常に警戒心の強い鳥で、荒川などの大河川でも対岸に観察者がいると飛び去ってしまう。写真撮影など人為的なストレスが本種の生存を脅かす一因となっている。

〔目名・科名〕 キツツキ目キツツキ科

〔和名〕 **アリスイ (越)**

〔学名〕 *Jynx torquilla* Linnaeus

埼玉県(2018) NT2 環境省(2014) -

指定状況 -

【形態】 全長 17～18cm。上面は灰褐色で茶色や黒の斑がある。喉から胸は黄褐色で黒い横縞がある。

【国内分布】 北海道と東北北部では夏鳥として渡来し繁殖するが、冬季は東西南部以南に移動する。

【主な生息環境】 平地から低山の疎林、草原、ヨシ原などに生息する。

【県内での生息状況】 冬鳥として渡来するが、渡来数は多くない。北本自然観察公園や芝川第一調節池（さいたま市）では出現頻度が高い。

【特記事項】 アリを主食としており、枯れ木に留まっている姿がよく見られるが、羽色が保護色となり見つけづらい種である。首がよく動き、学名もそこに由来する。

【目名・科名】	ハヤブサ目ハヤブサ科	埼玉県(2018)	NT2	環境省(2014)	-
【和名】	チョウゲンボウ (繁)				
【学名】	<i>Falco tinnunculus</i> Linnaeus	指定状況	-		
【形態】	全長オス 33cm、メス 38.5cm 翼開長 68～76cm。ハトくらいの大きさで尾が長い。上面は茶褐色で黒い斑がある。下面は淡い茶色で縦斑がある。オスは頭部が青灰色。				
【国内分布】	留鳥として全国に分布し、本州で繁殖する。				
【主な生息環境】	本来の営巣地は絶壁等のくぼみである。採食環境として原野や草地等の開けた場所を好む。				
【県内での生息状況】	1980年代頃より、低地帯の高架橋や取水塔のような人工建造物に営巣するようになり市街地でもよく見られるようになった。さいたま市内のビルではかなり以前から繁殖しているのが知られている。冬季は河川敷や農耕地、草地等の開けた場所でよく見られる。				
【特記事項】	畑地などの上空でホバリングしながら獲物を狙う姿をよく見かける。主食はネズミ、昆虫類だが、自分と同じ大きさのキジバトを捕らえることもある。				

【目名・科名】	スズメ目カラス科	埼玉県(2018)	NT2	環境省(2014)	-
【和名】	ホシガラス (繁)				
【学名】	<i>Nucifraga caryocatactes</i> (Linnaeus)	指定状況	-		
【形態】	全長 34～35cm。全身黒褐色で白い斑がある。尾の先端は白い。				
【国内分布】	留鳥又は漂鳥として、北海道、本州、四国の高山に生息する。				
【主な生息環境】	亜高山帯から高山帯の針広混交林、針葉樹林、ハイマツ帯に生息する。冬季には、低山に漂行するものが多い。				
【県内での生息状況】	県内では、亜高山帯植生のある雲取山、白岩山、酉谷山、雁坂峠、和名倉山、甲武信ヶ岳、三国山などの標高の高い山に生息しているが、現在は個体数は減少傾向にある。冬季には低山に漂行するが観察記録が減少している。				
【特記事項】	全身の白い斑を星空に例えて名前がつけられた。				

【目名・科名】	スズメ目シジュウカラ科	埼玉県(2018)	NT2	環境省(2014)	-
【和名】	コガラ (繁)				
【学名】	<i>Poecile montanus</i> (Conrad von Baldenstein)	指定状況	-		
【形態】	全長 12.5cm。頭部は黒く上面は灰褐色で下面は汚白色。喉は黒い。				
【国内分布】	留鳥として、北海道、本州、四国、九州に分布する。				
【主な生息環境】	低山帯から亜高山帯の森林に生息する。				
【県内での生息状況】	県内では低山帯、山地帯、亜高山帯の森林に留鳥として生息するが、山地帯でよく見られる。現在は、ニホンジカの採食影響などに伴う生息環境の悪化により、減少傾向が著しい。冬季は低地にも漂行するが、ヤマガラやヒガラほど漂行する個体数は多くない。				
【特記事項】	本種によく似たものにヒガラとシジュウカラがある。大きさは、シジュウカラ>コガラ>ヒガラの順で、本種は下面が白、シジュウカラは喉から腹に縦線があり、ヒガラは喉が黒い。				

【目名・科名】	スズメ目ウグイス科	埼玉県(2018)	NT2	環境省(2014)	-
【和名】	ヤブサメ (繁)				
【学名】	<i>Urosphena squameiceps</i> (Swinhoe)	指定状況	-		
【形態】	全長 10.5cm。尾が短く上面は茶褐色で下面は汚白色。眉斑は白くて長い。				
【国内分布】	夏鳥として屋久島以北に渡来する。				
【主な生息環境】	平地から山地の下層植生が豊かな林に生息する。				
【県内での生息状況】	県内には、丘陵帯から低山帯、山地帯に夏鳥として渡来し、下層植生が豊かな広葉樹林に生息し、繁殖する。かつては普通に生息していたが、現在、山地帯ではニホンジカの採食影響によりスズタケなどの下層植生が失われ、繁殖適地が激減しているため、確認記録が極端に少なくなっている。丘陵帯、低山帯でも個体数の減少が著しい。春秋の渡りの時期には通過個体が県内各地の平地林、公園の緑地、屋敷林などで記録される。				
【特記事項】	「シシシシシ・・・」という鳴き声は虫の声とよく間違えられる。				

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

魚類・円口類

昆虫類

甲殻類

多足類

クモ目

軟体動物

扁形動物

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
魚類・円口類
昆虫類
甲殻類
多足類
クモ目
軟体動物
扁形動物

【目名・科名】 スズメ目ムシクイ科

【和名】 **メボソムシクイ (繁)**

【学名】 *Phylloscopus xanthodryas* (Swinhoe)

埼玉県(2018) NT2 環境省(2014) -

指定状況 -

【形態】 全長 12.5 ~ 13cm。上面は緑褐色、下面は灰褐色で脇が黄色い。眉斑は黄白色で長い。

【国内分布】 夏鳥として、本州から九州に渡来する。

【主な生息環境】 亜高山帯の針葉樹林に生息する。

【県内での生息状況】 県内には、秩父山地の山地帯上部から亜高山帯の山地に夏鳥として渡来し、樹林地に生息し繁殖する。現在は、ニホンジカの採食影響などに伴う生息環境の悪化により、個体数の減少が著しい。春秋の渡りの時期には、通過個体が県内各地の平地林、公園の緑地、屋敷林などでも記録される。

【特記事項】 「ゼントリ、ゼントリ」と聞こえる特徴的な鳴き声をする。

【目名・科名】 スズメ目ムシクイ科

【和名】 **エゾムシクイ (繁)**

【学名】 *Phylloscopus borealoides* Portenko

埼玉県(2018) NT2 環境省(2014) -

指定状況 -

【形態】 全長 11 ~ 12cm。上面は茶褐色、下面は汚白色。眉斑は汚白色で長い。

【国内分布】 夏鳥として、北海道、本州、四国に渡来する。

【主な生息環境】 山地帯から亜高山帯の落葉樹林や針葉樹林、針広混交林に生息する。

【県内での生息状況】 県内には、秩父山地の山地帯から亜高山帯の山地に夏鳥として渡来し、樹林地に生息し繁殖する。現在は、ニホンジカの採食影響などに伴う生息環境の悪化により、個体数の減少が著しい。春秋の渡りの時期には通過個体が県内各地の平地林、公園の緑地、屋敷林などでも記録される。

【特記事項】 センダイムシクイやメボソムシクイとよく似ており外見からの識別は難しいが、鳴き声それぞれ異なり識別できる。本種は「ヒーツーキー、ヒーツーキー」と高い声で鳴く。

【目名・科名】 スズメ目ムシクイ科

【和名】 **センダイムシクイ (繁)**

【学名】 *Phylloscopus coronatus* (Temminck & Schlegel)

埼玉県(2018) NT2 環境省(2014) -

指定状況 -

【形態】 全長 12 ~ 13cm。上面は黄色味を帯びた緑褐色、下面は汚白色。頭中央部は脇より淡色の線がある。

【国内分布】 夏鳥として、九州以北に渡来する。

【主な生息環境】 平地から山地の落葉広葉樹林に生息する。メボソムシクイやエゾムシクイに比べ標高の低い山地に生息する。

【県内での生息状況】 県内には、低山帯から山地帯の森林に夏鳥として渡来し、落葉広葉樹林に生息し繁殖する。現在は、ニホンジカの採食影響などに伴う生息環境の悪化により、個体数の減少が著しい。春秋の渡りの時期には通過個体が県内各地の平地林、公園の緑地、屋敷林などでも記録される。

【特記事項】 「チヨチヨビー」という特徴的な鳴き声は、ききなしに「焼酎一杯グイー」などがある。

【目名・科名】 スズメ目ヨシキリ科

【和名】 **オオヨシキリ (繁)**

【学名】 *Acrocephalus orientalis* (Temminck & Schlegel)

埼玉県(2018) NT2 環境省(2014) -

指定状況 -

【形態】 全長 18 ~ 19cm。上面はオリーブ褐色。下面はクリーム白色。口内は鮮やかなオレンジ色。

【国内分布】 夏鳥として全国に渡来してヨシ原で繁殖する。

【主な生息環境】 河川、湖沼、休耕田等のヨシ原。

【県内での生息状況】 県内では低地帯のヨシ原を中心に繁殖している。現在は繁殖地である河川敷のヨシが外来種のおオブタクサやアレチウリなどに圧迫され減少しているため、一部に生息数の著しい減少がみられる。

【特記事項】 一夫多妻制が知られている。オスの方がメスよりも早く渡来し、よい縄張りを確保してメスを誘う。巣づくりはメスだけが行い、子育ても主にメスが行う。

〔目名・科名〕	スズメ目ゴジュウカラ科	埼玉県(2018)	NT2	環境省(2014)	-
〔和名〕	ゴジュウカラ (繁)				
〔学名〕	<i>Sitta europaea</i> Linnaeus	指定状況			-
〔形態〕	全長 13.5cm。上面は青灰色、下面は白く腹は黄褐色。目先から頸に黒い線がある。				
〔国内分布〕	留鳥として、九州以北に分布する。				
〔主な生息環境〕	山地の落葉広葉樹林に生息する。				
〔県内での生息状況〕	県内では、山地帯から亜高山帯の樹林地に留鳥として生息し繁殖する。現在は、ニホンジカの採食影響などに伴う生息環境の悪化により、減少傾向にある。冬季は低山帯から台地・丘陵帯まで漂行するものもある。				
〔特記事項〕	木を逆さになって降りてくることができるのは本種だけである。				

〔目名・科名〕	スズメ目ヒタキ科	埼玉県(2018)	NT2	環境省(2014)	-
〔和名〕	トラツグミ (繁)				
〔学名〕	<i>Zoothera dauma</i> (Latham)	指定状況			-
〔形態〕	全長 29.5cm。上面は黄褐色で黒色の三日月斑、下面は白く黄褐色と黒褐色の三日月斑がある。				
〔国内分布〕	留鳥または漂鳥として、本州から九州に分布する。				
〔主な生息環境〕	低山から亜高山帯の山地の林に生息する。				
〔県内での生息状況〕	県内では丘陵帯から亜高山帯までの森林で繁殖するが、減少傾向にあり、現在では丘陵部での繁殖記録が途絶えている。山地部においても減少傾向にある。冬季には、低地帯にも漂行し、市街地の公園や社寺林、人家の庭にも出現する。				
〔特記事項〕	「キーン」という金属的で特徴的な鳴き方をする。妖怪の鶴(ぬえ)の正体といわれる。				

〔目名・科名〕	スズメ目ヒタキ科	埼玉県(2018)	NT2	環境省(2014)	-
〔和名〕	クロツグミ (繁)				
〔学名〕	<i>Turdus cardis</i> Temminck	指定状況			-
〔形態〕	全長 21.5cm。オスでは頭部、胸、上面が黒い。腹面は白く黒い斑がある。嘴と足は黄色。メスでは上面がオリーブ褐色で、下面は白く黒褐色の斑がある。				
〔国内分布〕	夏鳥として、北海道から九州に渡来する。				
〔主な生息環境〕	平地から山地までのやや明るい林に生息する。				
〔県内での生息状況〕	県内には、丘陵帯から山地帯までの林に夏鳥として渡来し繁殖するが、現在は減少傾向にある。雑木林の手入れが行われなくなることで暗い林となり、本種にとっては生息環境の悪化につながっている。丘陵帯では、山地帯に比べ減少傾向が著しいが、狭山丘陵や加治丘陵では現在も生息している。春の渡り期には低地の林や公園の緑地でさえずりを聞くことがある。				
〔特記事項〕	複雑な節回りで美しい声でよく鳴く。				

〔目名・科名〕	スズメ目ヒタキ科	埼玉県(2018)	NT2	環境省(2014)	-
〔和名〕	アカハラ (繁)				
〔学名〕	<i>Turdus chrysolaus</i> Temminck	指定状況			-
〔形態〕	全長約 23.5cm。上面はオリーブ褐色で脇は橙褐色、腹の中央は白い。メスは全体的に色が淡い。				
〔国内分布〕	夏鳥として、北海道から本州中部で繁殖し、本州中部以南で越冬する。				
〔主な生息環境〕	平地から亜高山帯の落葉広葉樹林や針広混交林に生息する。冬季は平地林、公園や社寺の林にも生息する。				
〔県内での生息状況〕	県内では、山地帯から亜高山帯の森林に生息し繁殖するが、ニホンジカの採食影響などに伴う生息環境の悪化により、山地での個体数の減少傾向が著しい。冬季には低地帯にも漂行し、市街地の公園や社寺林、人家の庭にも出現する。				
〔特記事項〕	夏季には、朝早くから「キョロン、キョロン」と二声ずつよく鳴く。				

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

魚類・円口類

昆虫類

甲殻類

多足類

クモ目

軟体動物

扁形動物

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
魚類・円口類
昆虫類
甲殻類
多足類
クモ目
軟体動物
扁形動物

【目名・科名】 スズメ目ヒタキ科
 埼玉県(2018) NT2 環境省(2014) -
 【和名】 **サメビタキ (繁)**
 【学名】 *Muscicapa sibirica* Gmelin
 指定状況 -

【形態】 全長 13.5cm。上面は灰褐色、下面は汚白色で胸と脇に灰褐色縦斑がある。目の周囲は白い。
 【国内分布】 夏鳥として本州中部以北に渡来する。
 【主な生息環境】 亜高山帯の針葉樹林に生息する。
 【県内での生息状況】 県内には、夏鳥として渡来し、秩父山地の山地帯上部から亜高山帯の樹林地に生息する。元々、個体数の多い鳥ではなかったが、現在は、ニホンジカの採食影響などに伴う生息環境の悪化により、減少傾向にある。
 【特記事項】 秋の渡り時期に低地の公園等でよく見られるが、コサメビタキとの区別がやや難しい。

【目名・科名】 カイツブリ目カイツブリ科
 埼玉県(2018) DD 環境省(2014) -
 【和名】 **ミミカイツブリ (越)**
 【学名】 *Podiceps auritus* (Linnaeus)
 指定状況 -

【形態】 全長 31 ~ 38cm、翼開長 59 ~ 65cm。嘴は黒く真っ直ぐである。冬羽では頭部の目より上が黒く、下が白い。夏羽では目先から後頭にかけて金色の飾り羽ができる。
 【国内分布】 冬鳥として全国に渡来するが、ハジロカイツブリより少ない。
 【主な生息環境】 海岸、河口などに生息する他、大きな湖沼でもみられる。単独でいることが多い。
 【県内での生息状況】 県内には冬鳥として渡来する。彩湖（戸田市）、狭山湖、利根川、荒川、久喜菖蒲公園など越冬する場所が限定される上、渡来数はハジロカイツブリよりずっと少ない。
 【特記事項】 他県ランク：山梨県 NT

【目名・科名】 アマツバメ目アマツバメ科
 埼玉県(2018) DD 環境省(2014) -
 【和名】 **ハリオアマツバメ (繁)**
 【学名】 *Hirundapus caudacutus* (Latham)
 指定状況 -

【形態】 全長 19 ~ 21cm、翼開長 50 ~ 53cm。体型は太い紡錘形で尾は角尾で短い。全身黒褐色で喉と下腹から下尾筒が白い。
 【国内分布】 夏鳥として、本州中部以北から北海道に渡来する。その他の地方では旅鳥。
 【主な生息環境】 平地から山地の森林に生息し、樹洞や岩の隙間に営巣する。
 【県内での生息状況】 春季や秋季の移動期には低地でも時々観察される。秩父山系においては、かつては夏季にも生息を見たが、現在は夏季の観察記録が途絶えている。繁殖状況は不明である。
 【特記事項】 尾羽の羽軸の先端が針状に突出することから名前が付けられた。

【目名・科名】 チドリ目カモメ科
 埼玉県(2018) DD 環境省(2014) -
 【和名】 **アジサシ (繁)**
 【学名】 *Sterna hirundo* Linnaeus
 指定状況 -

【形態】 全長 32 ~ 39cm、翼開長 72 ~ 83cm。コアジサシより大きい体型がよく似ている。夏羽では頭は黒く体上面が灰色で下面は淡灰色。冬羽では前頭部が白くなり体下面も白い。
 【国内分布】 主に旅鳥として全国の海岸で見られる
 【主な生息環境】 旅鳥として春秋の渡り期に全国の海岸、河口、干潟、砂浜、湖沼、大きな河川などで見られる。
 【県内での生息状況】 春秋の渡り期に、彩湖（戸田市）、黒浜沼（蓮田市）、伊佐沼（川越市）、大相模調節池（越谷市）、利根川等で確認記録がある。利根川ではコアジサシのコロニー内で繁殖している可能性もあるが詳細は不明である。
 【特記事項】 富山県・群馬県・東京都などでは繁殖が確認されている。

【目名・科名】	タカ目タカ科	埼玉県(2018)	DD	環境省(2014)	-
【和名】	トビ (繁)				
【学名】	<i>Milvus migrans</i> (Boddaert)	指定状況			-
【形態】	全長オス 58.5cm、メス 68.5cm、翼開長 157～162cm。大型の猛禽類でカラスに比べてかなり大きい。全身赤味のある黒褐色で、翼の下面風切り羽の元の部分に白い斑がある。尾は凹型をしている。				
【国内分布】	留鳥として九州以北に普通に生息する。				
【主な生息環境】	平地から高山にかけて市街地、海岸、湖沼など幅広い場所で見られる。				
【県内での生息状況】	低地帯から低山帯に留鳥として生息する。利根川や荒川等の河川敷や広い農耕地などで多く見られるが、特に渡良瀬遊水地には多い。入間市、鴻巣市では繁殖が確認されており、現在は各地で増加傾向にあるが不明な点も多い。移動時期や冬季には低地でもよく見られている。				
【特記事項】	「ピーヒョロロロ」と鳴く。海岸などでは人々が手に持った食料をトビに狙われて持ち去られることがある。以前は東京都内でもよく見られていたが、カラスに追われて現在見ることはない。猛禽類であるが、主に死肉を食べる。				

【目名・科名】	タカ目タカ科	埼玉県(2018)	DD	環境省(2014)	EN
【和名】	イヌワシ (繁 DD・越 DD)				
【学名】	<i>Aquila chrysaetos</i> (Linnaeus)	指定状況		国指定天然記念物・国内希少野生動物種	
【形態】	全長 オス 78～86cm メス 85～95cm、翼開長 170～210cm。トビに比べてかなり大きい。全身黒褐色で後頭部は金茶色。若鳥では初列風切りと次列風切りに白色部がある。				
【国内分布】	北海道、本州、四国、九州の山地に留鳥として生息するが、局所的である。				
【主な生息環境】	低山から高山の岩場や崖のある森林帯に生息し、山地の伐採地、若い植林地、草原などの開けた環境でウサギやタヌキ、ヤマドリ、ヘビなどを捕食する。				
【県内での生息状況】	過去に、奥秩父山系で目撃されたという情報はありますが、現在は確認記録がない。県内の記録が少ない原因としては、県内の山岳地帯に本種の好む岩場や崖のある森林帯が少ないことが考えられる。				
【特記事項】					

【目名・科名】	フクロウ目フクロウ科	埼玉県(2018)	DD	環境省(2014)	-
【和名】	オオコノハズク (繁 DD・越 DD)				
【学名】	<i>Otus lempiji</i> (Horsfield)	指定状況			-
【形態】	全長 24～25cm。全身灰褐色で、黒や灰色の複雑な斑がある。虹彩はオレンジ色。				
【国内分布】	留鳥として全国的に生息するが、北地のものは冬、暖地へ移動する。				
【主な生息環境】	平地から山地のよく茂った林にすみ、秋冬には村落付近の神社や寺の木や竹やぶの中にあることが多い。日中は木の茂みや樹洞で休み、夕方から活動してネズミなどを捕まえる。				
【県内での生息状況】	山地帯での繁殖状況は不明である。低山帯ではかつて秩父市や小鹿野町で繁殖記録があったが、現在確かな繁殖記録は得られていない。冬は狭山丘陵などの丘陵・台地帯や低地帯へ漂行し、上尾市、吉川市、熊谷市、北本市等で公園や屋敷林での記録がある。				
【特記事項】	冬のねぐらで写真撮影など人為的なストレスが本種の生存を脅かす一因となっている。				

【目名・科名】	スズメ目ツバメ科	埼玉県(2018)	DD	環境省(2014)	-
【和名】	コシアカツバメ (繁)				
【学名】	<i>Hirundo daurica</i> Laxmann	指定状況			-
【形態】	全長 18～19cm。下面は白く、黒い縦斑があり尾の切れ込みは深い。腰は橙色であるが飛翔時は白っぽく見える。				
【国内分布】	夏鳥として、九州以北に渡来する。				
【主な生息環境】	周辺に農耕地や河川敷など開けた環境のある市街地や集落に生息する。				
【県内での生息状況】	1980年代には熊谷市や川口市での繁殖記録があるが、現在は確認記録がほとんど得られておらず、詳細は不明である。春秋の渡りの時期には通過と思われる個体が記録されていたが、現在、通過記録もほとんどない。				
【特記事項】	巣はツバメのようにお椀型ではなく、入り口の狭いとっくり型である。				

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
魚類・円口類
昆虫類
甲殻類
多足類
クモ目
軟体動物
扁形動物

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
魚類・円口類
昆虫類
甲殻類
多足類
クモ目
軟体動物
扁形動物

〔目名・科名〕 スズメ目センニユウ科
 埼玉県(2018) DD 環境省(2014) EN
 〔和名〕 **オオセツカ (越)**
 〔学名〕 *Locustella pryeri* (Seebohm) 指定状況 国内希少野生動物種

【形態】 全長13～14cm。近似種のセツカより大型で赤褐色味が強い。
 【国内分布】 本州北部で繁殖し、冬は本州南部へ移動する漂鳥。
 【主な生息環境】 湖沼、河川周辺のヨシ原や草地で繁殖し、冬は暖かい地方のヨシ原や草地で越冬するが、分布は極めて限定されている。
 【県内での生息状況】 荒川、利根川等のヨシ原や見沼田圃の休耕田等で過去に少数の確認がある。県内で越冬している可能性もあるが詳細は不明である。
 【特記事項】 渡良瀬遊水地では2010年より記録されはじめ、2016年の調査ではさえずりオスの個体数は20羽となり、継続して繁殖が確認されている。他県ランク：茨城県 EN、栃木県 CR、千葉県 CR、東京都区部 CR

〔目名・科名〕 スズメ目ムクドリ科
 埼玉県(2018) DD 環境省(2014) -
 〔和名〕 **コムクドリ (繁)**
 〔学名〕 *Agropsar philippensis* (Forster) 指定状況 -

【形態】 全長18～19cm。オスの頭部は白く頸は赤茶色、背と腰は黒い。下面は灰白色。メスは全身灰褐色。
 【国内分布】 夏鳥として北海道から本州中部に渡来する。
 【主な生息環境】 平地から山地の明るい林や果樹園などに生息する。
 【県内での生息状況】 かつては、わずかではあるが県内でも繁殖しており、1980年代初め頃までは繁殖記録があった。古い記録として、1977年6月5日に皆野町で繁殖したものは皆野駅近くにある商店の屋根に営巣していた。2010年5月秩父市の寺にある桜の樹洞で営巣した。春秋の渡りの時期には県内各地を通過するが、通過個体数も減少傾向にある。
 【特記事項】 2015年8月には春日部市内の樹木に数千羽がねぐら入りしていた。

〔目名・科名〕 スズメ目アトリ科
 埼玉県(2018) DD 環境省(2014) -
 〔和名〕 **コイカル (繁)**
 〔学名〕 *Eophona migratoria* Hartert 指定状況 -

【形態】 全長18.5cm。オスは頭が黒く、首から背は灰褐色で、翼と尾は黒色。初列と次列風切りの先が白く、雨覆いに白斑がある。下面は淡色で、脇は褐色がかかる。嘴は太く、橙黄色。メスの頭は褐色で、黒くない。
 【国内分布】 主に冬鳥として少数が渡来するが、特に東日本では少ない。熊本県や島根県では繁殖記録がある。
 【主な生息環境】 秋冬には平地から山地の落葉広葉樹の林にすみ、村落付近にも来る。数羽から十数羽の群れをつくり、ムク、エノキなどの木の実を食べる。
 【県内での生息状況】 1990年代に旧浦和市（現さいたま市）の秋ヶ瀬公園等で繁殖期に記録があるが、確実な繁殖記録は得られていない。
 【特記事項】 イカルの群れに混じり渡りの時期に見られることが時々ある。

〔目名・科名〕 スズメ目ホオジロ科
 埼玉県(2018) DD 環境省(2014) VU
 〔和名〕 **アオジ (繁)**
 〔学名〕 *Emberiza spodocephala* Pallas 指定状況 -

【形態】 全長16cm。オスは頭部が暗緑灰色、上面は緑灰色で黒褐色の縦斑がある。腹面は緑黄色。メスでは頭部の黒味がなく全体に色が淡い。
 【国内分布】 北海道で夏鳥、本州中部以北で留鳥または漂鳥として繁殖し、冬季は南方や平地に移動する。
 【主な生息環境】 繁殖期は山地帯から亜高山帯の明るい林、草地などに生息し、冬季は平地から低山の林縁や藪、人家の庭などに生息する。
 【県内での生息状況】 県内には冬鳥として渡来し、県内各地の林や藪、ヨシ原、公園、人家の庭などに普通に生息する。長野県境にある奥秩父の三国峠付近（標高1,740m）や雁峠付近（標高1,800m）では夏季の観察記録もあるが、現在は繁殖地での情報がほとんど得られていない。
 【特記事項】 春の移動時期に、天気の良いと低地帯でも囀る姿を見ることがある。

【目名・科名】	ペリカン目サギ科	埼玉県(2018)	LP	環境省(2014)	-
【和名】	アマサギ (繁)				
【学名】	<i>Bubulcus ibis</i> (Linnaeus)	指定状況	-		
【形態】	全長46～56cm、翼開長88～96cm。シラサギといわれる白いサギの中で最も小型のもので首が短い。夏羽では上半身と背の飾り羽が亜麻色になる。冬羽では全身が白くなる。嘴は黄色く短い。				
【国内分布】	夏鳥として日本に渡来し本州、中国、四国で繁殖する。南西諸島では冬鳥。				
【主な生息環境】	水田、牧場、草地など。英語でCattle (畜牛) Egret (サギ)と言われるように、牧場で牛の背に乗っているところがよく見られる。				
【県内での生息状況】	県内では主に低地帯の水田で観察されていたが確認数は減少している。繁殖期はサギ類のコロニー内に混じり営巣している。繁殖期を過ぎるとチュウサギなどと共に水田で群れになっているところが観察されるが多くない。				
【特記事項】	繁殖期の婚姻色では、嘴はオレンジ色になり、目先も赤くなる。				

【目名・科名】	カッコウ目カッコウ科	埼玉県(2018)	LP	環境省(2014)	-
【和名】	ジュウイチ (繁)				
【学名】	<i>Hierococcyx hyperythrus</i> (Gould)	指定状況	-		
【形態】	全長32cm。頭部から上面は灰黒色で後頭に白斑がある。下面は赤褐色。				
【国内分布】	夏鳥として北海道、本州、四国、九州に渡来する。				
【主な生息環境】	山地の森林に生息するが、日本で繁殖するカッコウ科の他の3種(カッコウ、ツツドリ、ホトトギス)より標高の高い山地に生息する。				
【県内での生息状況】	県内には夏鳥として渡来し、低山帯上部から山地帯、亜高山帯の森林に生息する。ニホンジカの採食影響により下層植生が失われたことに伴い托卵相手(コルリ、ルリビタキ、コマドリなど)が減少し、本種も減少傾向にある。また、越冬地である東南アジアの環境悪化も原因の一つと考えられている。春秋の渡り期には市街地の緑地などでも観察されるが、ツツドリやホトトギスほど多くない。				
【特記事項】	「ジュウイチー、ジュウイチー」と鳴く声から名前が付けられている。				

【目名・科名】	カッコウ目カッコウ科	埼玉県(2018)	LP	環境省(2014)	-
【和名】	ツツドリ (繁)				
【学名】	<i>Cuculus optatus</i> Gould	指定状況	-		
【形態】	全長32cm。頭部、胸、上面は青灰色。下面は白く、黒色のための粗い横縞がある。メスには頭部と上面が赤褐色で黒色の斑がある赤色型も知られる。				
【国内分布】	夏鳥として九州以北に渡来する。				
【主な生息環境】	平地から亜高山帯までの山林に生息する。				
【県内での生息状況】	県内には夏鳥として渡来し、低山帯から亜高山帯の森林に生息するが、ニホンジカの採食影響などに伴う生息環境の悪化のため托卵相手(センダイムシクイ、メボソムシクイなど)が減少し、本種も減少傾向にある。本種の越冬地である東南アジアの環境悪化も減少の原因の一つと考えられている。春秋の通過時には市街地の公園やサクラ並木、人家の庭などの緑地でもよく観察される。				
【特記事項】	「ポポ、ポポ」とよく通る低い声で鳴く。カッコウ科の他の3種と異なり、鳴き声そのものからつけられた名前ではなく、筒に息を吹き込んだ時の音に似ている鳴き声から名付けられた。				

【目名・科名】	チドリ目チドリ科	埼玉県(2018)	LP	環境省(2014)	VU
【和名】	シロチドリ (繁)				
【学名】	<i>Charadrius alexandrinus</i> Linnaeus	指定状況	-		
【形態】	全長15～17.5cm、翼開長42～45cm。コチドリより少し大きい。オスでは前頭が黒色で頭頂部から後ろは燈色。上面は灰褐色で下面は白い。メスは頭部から上面が灰褐色となる。				
【国内分布】	北海道から南西諸島に留鳥として生息するが、北海道、東北部では夏鳥のものが多い。				
【主な生息環境】	河川敷、埋立地、砂浜などで繁殖し、干潟や休耕田にも採餌に出現する。				
【県内での生息状況】	1970年代までは、荒川(熊谷市付近)や利根川(本庄市から羽生市)の砂礫河原で普通に繁殖していたが、現在は減少著しく、利根川、荒川でも観察する機会が少ない。春秋には休耕田にも飛来するが、近年は渡り期においても渡来数の減少が著しい。				
【特記事項】	小さい雛を連れた親は擬傷といって、外敵の前で傷を負っているような素振りを見せて自分に注意を惹きつける行動をとる。繁殖地へのオフロード車の進入は繁殖に大きな脅威となっている。				

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

魚類・円口類

昆虫類

甲殻類

多足類

クモ目

軟体動物

扁形動物

〔目名・科名〕 ハト目ハト科

〔和名〕 **アオバト (繁)**

〔学名〕 *Treron sieboldii* (Temminck)

埼玉県(2018) RT 環境省(2014) -

指定状況 -

【形態】 全長約33cm。キジバトとほぼ同じ大きさで、全身青緑色で嘴が青灰色のきれいな鳩である。オスでは、中雨覆い小雨覆いは赤紫色。

【国内分布】 九州以北に分布する留鳥で、東北・北海道では冬に南下する。

【主な生息環境】 平地から山地のよく茂った広葉樹林に生息する。ヤマザクラやイイギリ、ヤマグワなどの実を好んで食す。

【県内での生息状況】 山地帯から亜高山帯下部の落葉広葉樹林や針広混交林に生息するが、個体数は多くない。県内では、1987年6月24日に、秩父山地の熊倉山山頂近く(標高1,300m)のヒノキ林で、巣にいた成鳥と雛が発見された記録がある。この記録が県内唯一の繁殖記録と思われる。春秋には移動途中の個体が低地で見られることがある。長期にわたる調査結果でも減少傾向にある。

【特記事項】 「オー、アオー、アオー」とよく通る声で鳴く。海岸に塩水を飲みに来ることが知られているが、県内では、畜舎付近の堆肥からミネラル分をとっていることがある。

〔目名・科名〕 カッコウ目カッコウ科

〔和名〕 **ホトトギス (繁)**

〔学名〕 *Cuculus poliocephalus* Latham

埼玉県(2018) RT 環境省(2014) -

指定状況 -

【形態】 全長27cm。頭部、胸、上面は青灰色。下面は白く、黒色の太めの粗い横縞がある。メスには頭部と上面が赤褐色で黒色の斑がある赤色型も知られる。

【国内分布】 夏鳥として北海道、本州、四国、九州、南西諸島に渡来する。

【主な生息環境】 平地から亜高山帯までの山林に生息する。

【県内での生息状況】 県内には夏鳥として渡来し、低地帯から亜高山帯の森林に生息する。山地ではニホンジカの採食影響により、ササ帯が減少し、托卵相手のウグイスが減少したため、渡来数は減少傾向にある。本種の越冬地である東南アジアの環境悪化も減少の原因の一つであろうといわれている。反面、低地帯や台地・丘陵帯で藪の増加によりウグイスが増えているところでは増加傾向にある。春秋の渡り期には市街地の緑地などでも観察される。

【特記事項】 本種とツツドリ、カッコウは姿がよく似ているため、秋の移動時期に観察する機会が多いものの同定が難しい。大きさは、カッコウ>ツツドリ>ホトトギスとなる。

〔目名・科名〕 チドリ目シギ科

〔和名〕 **タシギ (越)**

〔学名〕 *Gallinago gallinago* (Linnaeus)

埼玉県(2018) RT 環境省(2014) -

指定状況 -

【形態】 全長25~27cm、翼開長44~47cm。長い嘴を持ち全身茶色で上面に黄白色の線が左右2本ずつある。飛び立つときに「ジェーッ」と濁った声を出すことが多い。

【国内分布】 冬鳥あるいは旅鳥として全国に渡来する。

【主な生息環境】 水田、河川、湖沼などの湿地。

【県内での生息状況】 県内には冬鳥として渡来し、水田、河川、湖沼などの湿地に生息する。かつては各地の湿地に普通に生息していたが、湿地の埋め立てや圃場整備に伴い冬季に水田の乾燥化が進んだことなどにより生息適地が減ったため数を減らしている。

【特記事項】 よく似た種にハリオシギ、チュウジシギ、オオジシギがあり、野外での識別は難しい。

〔目名・科名〕 ブッポウソウ目カワセミ科

〔和名〕 **カワセミ (繁)**

〔学名〕 *Alcedo atthis* (Linnaeus)

埼玉県(2018) RT 環境省(2014) -

指定状況 -

【形態】 全長17cm。上面がコバルトブルーで下面は橙色。メスの下嘴は赤い。

【国内分布】 全国に留鳥として分布している。

【主な生息環境】 河川、湖沼、小川、用水、などの水辺で見られる。土の崖に嘴で巣穴を掘る。水辺に繁殖適地がないと、人が掘った穴の側面や残土等の土盛に巣を作ることがある。

【県内での生息状況】 県内の低地帯から低山帯にかけての河川・池沼に周年生息しており、小魚や小さいザリガニ、エビなどを捕らえる。かつて水質悪化のため都市近郊でいなくなったが、水質改善と共に都市河川でも姿がよく見られるようになり繁殖もしている。

【特記事項】 「チー」という高い声を出しながら、水面すれすれを飛ぶ姿がよく見られる。繁殖期にはオスが捕えた餌をメスに差し出す求愛給餌が行われる。生息環境の改善に伴い個体数は増加傾向にあるようだが繁殖適地はまだ少ない。

【目名・科名】	キツツキ目キツツキ科	埼玉県(2018)	RT	環境省(2014)	-
【和名】	アオゲラ (繁)				
【学名】	<i>Picus awokera</i> Temminck	指定状況			-
【形態】	全長 29cm。上面は緑褐色でオスは頭頂から後頭にかけて及び顎線が赤い。下面は白く下腹部に縦斑がある。メスの頭頂部は赤くないが後頭部が赤い。				
【国内分布】	留鳥として本州・四国・九州・大隈諸島に分布する。				
【主な生息環境】	山地から平地のよく茂った林に生息し、生木の幹に穴を掘って巣穴とする。冬季に山地から低地に移動する個体も多い。				
【県内での生息状況】	かつての主な生息地は低山帯から山地帯であったが、雑木林が放置され成熟した落葉広葉樹林となりキツツキ類にとって好適な生息環境が整ったことにより台地・丘陵帯での繁殖記録が増加している。また、現在は低地帯でも雑木林や公園などで繁殖記録が増加している。				
【特記事項】	日本固有種である。				

【目名・科名】	スズメ目シジュウカラ科	埼玉県(2018)	RT	環境省(2014)	-
【和名】	ヤマガラ (繁)				
【学名】	<i>Poecile varius</i> (Temminck & Schlegel)	指定状況			-
【形態】	全長 14 ~ 15cm。頭部両端は黒く頭頂部は白色で後頭部は黄褐色。上面上部は栗色その下は青灰色。下面は茶褐色。				
【国内分布】	留鳥または漂鳥として、北海道、本州、四国、九州、及び小笠原諸島を除く島嶼に分布する。				
【主な生息環境】	平地から山地の林に生息する。				
【県内での生息状況】	県内では丘陵帯から山地帯の森林に生息し繁殖する。県内の山地においては、一時増加傾向にあったが、現在は再び減少傾向に転じた。原因として、ニホンジカの採食影響などに伴う生息環境の悪化が考えられる。冬季は低地に漂行するが、漂行個体数の減少は特に見られない。				
【特記事項】	冬季に好物のエゴノキの実を探している姿がよく見られる。				

【目名・科名】	スズメ目シジュウカラ科	埼玉県(2018)	RT	環境省(2014)	-
【和名】	ヒガラ (繁)				
【学名】	<i>Periparus ater</i> (Linnaeus)	指定状況			-
【形態】	全長 10.5 ~ 11cm。頭部は黒く小さい冠羽がある。後頭部は白い。上面は濃灰青色で下面は汚白色で脇は灰褐色。				
【国内分布】	留鳥又は漂鳥として屋久島以北に分布する。				
【主な生息環境】	低山帯から亜高山帯の山地の林に生息する。				
【県内での生息状況】	県内では、低山帯から亜高山帯の森林に留鳥または漂鳥として生息し、繁殖するが、シジュウカラ、ヤマガラより標高の高い山地に多い。近年は、ニホンジカの採食影響などに伴う生息環境の悪化により、減少傾向にある。冬季は低地にも漂行するが、漂行個体数も減少傾向にある。				
【特記事項】	山小屋などで人あまりを恐れずに近寄ってくることもある。				

【目名・科名】	スズメ目ウグイス科	埼玉県(2018)	RT	環境省(2014)	-
【和名】	ウグイス (繁)				
【学名】	<i>Cettia diphone</i> (Kittlitz)	指定状況			-
【形態】	全長 14 ~ 16cm。オスの方が大きい。体の上面は暗緑色、尾は赤褐色味が強い。灰白色の眉斑が特徴。				
【国内分布】	全国的に繁殖する留鳥。秋冬には山地や北部のものは平地や暖地に移動する漂鳥でもある。				
【主な生息環境】	下生えの多い林、ササやぶ、草生地、ヨシ原、林縁の茂みなどにすみ、市街地や公園や庭の植え込みや生垣にもいる。低木の枝の茂み、ススキの株の中、ササやぶの中などの低い場所に、ササやススキなどのイネ科植物の葉を使って巣をつくる。				
【県内での生息状況】	かつて県内では主に台地・丘陵帯から山地帯・亜高山帯にかけて普通に繁殖し、低地帯においては比較的規模の大きい樹林地や荒川、利根川、江戸川等の河川敷に発達したヨシ原等で少数が繁殖するという生息状況であった。しかし、現在は台地・丘陵帯の林の手入れが行き届かなくなったことで下層植生が本種の生息に好適なものとなり、増加する傾向にある。また、低地の林などでも増加の傾向がみられる。その反面、低山帯から亜高山帯ではニホンジカの採食影響によって森林の下層植生であるスズケなどの減少が著しく、営巣地が喪失したことにより減少傾向にある。				
【特記事項】	外来種のソウシチョウなどとの競合が懸念される。				

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

魚類・円口類

昆虫類

甲殻類

多足類

クモ目

軟体動物

扁形動物

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
魚類・円口類
昆虫類
甲殻類
多足類
クモ目
軟体動物
扁形動物

〔目名・科名〕 スズメ目キバシリ科
 埼玉県(2018) RT 環境省(2014) -
 〔和名〕 **キバシリ (繁)**
 〔学名〕 *Certhia familiaris* Linnaeus
 指定状況 -

【形態】 全長 13.5cm。上面は褐色で汚白色の斑がある。下面は白い。
 【国内分布】 留鳥として四国以北に分布する。
 【主な生息環境】 亜高山帯の針葉樹林に生息する。
 【県内での生息状況】 県内では、山地帯から亜高山帯の樹林地に留鳥として生息する。現在は、ニホンジカの採食影響などに伴う生息環境の悪化により、減少傾向にあるが決して稀な鳥ではない。
 【特記事項】 木の幹に尾で体を支えて縦に留まり、幹を下から上へとらせん状に登りながら、樹皮のすき間に潜む昆虫やクモ類などを捕食する。

〔目名・科名〕 スズメ目ヒタキ科
 埼玉県(2018) RT 環境省(2014) -
 〔和名〕 **ルリビタキ (越)**
 〔学名〕 *Tarsiger cyanurus* (Pallas)
 指定状況 -

【形態】 全長 14cm。オスでは上面が青色で下面は白く脇はオレンジ色。メスでは上面がオリーブ褐色。
 【国内分布】 留鳥または漂鳥として北海道、本州、四国で繁殖し、冬季は本州以南で越冬する。
 【主な生息環境】 夏季は亜高山帯の落葉樹林、針広混交林、針葉樹林に生息し、冬季は平地から山地の林などで越冬する。
 【県内での生息状況】 夏季は、秩父山地の山地帯上部から亜高山帯の樹林地に生息し繁殖する。現在は、ニホンジカの採食影響により下層植生が失われたことに伴い、生息環境が悪化して個体数は減少傾向にある。冬季は、低地から山地の林に漂行し、越冬する。社寺林や市街地の公園の林にも姿を見せる。
 【特記事項】 オスの羽色が青くなるには3年かかる。

〔目名・科名〕 スズメ目ヒタキ科
 埼玉県(2018) RT 環境省(2014) -
 〔和名〕 **キビタキ (繁)**
 〔学名〕 *Ficedula narcissina* (Temminck)
 指定状況 -

【形態】 全長 13.5cm。オスは上面が黒色で翼に白斑がある。眉斑、脇、下面は黄色、胸はオレンジ色。メスは全体的にオリーブ褐色である。
 【国内分布】 夏鳥としてほぼ全国に渡来する。
 【主な生息環境】 本種は平地から山地のよく繁った落葉広葉樹林や常緑広葉樹林に生息、繁殖する。1960年代の燃料革命以後、雑木林の萌芽更新が行われなくなり、林が成熟してきたため、樹の間の空間で昆虫を捕らえる本種の生息にとって好適な環境が増えてきた。また、スギやヒノキが混じった針広混交林などにも生息する。
 【県内での生息状況】 主な繁殖地は低山から山地帯である。この10年ほどの間、狭山丘陵、加治丘陵、高麗丘陵などの丘陵地や所沢市狭山市、日高市などの平地林での繁殖記録が増加している。
 【特記事項】 春の通過の時期に、低地の公園や雑木林などで明るいよく通る声で鳴いている姿が見られる。

〔目名・科名〕 スズメ目ヒタキ科
 埼玉県(2018) RT 環境省(2014) -
 〔和名〕 **オオルリ (繁)**
 〔学名〕 *Cyanoptila cyanomelana* (Temminck)
 指定状況 -

【形態】 全長 16 ~ 16.5cm。オスは上面が濃い青色で、頬から喉、胸、脇は黒く腹は白い。メスは全体が褐色で、下面は淡く、喉と腹は白色。
 【国内分布】 夏鳥として九州以北に渡来する。
 【主な生息環境】 繁殖期には低山から山地の主に溪流沿いの森林に生息する。山道に沿った岩の上や木のへこみ、人家のひさしの下などにコケを積み上げて皿型の巣をつくる。オスは突出した枯れ枝や梢に留まりよく囀る。
 【県内での生息状況】 秩父山地では普通に生息する。春夏の渡りの時期には低地帯などでも通過記録が多い。台地・丘陵帯では繁殖地が限定的であり、狭山丘陵や加治丘陵などでは渓谷に沿った林が存在することからごく少数の繁殖が記録されている。
 【特記事項】 春の通過時には低地の公園や雑木林などで鳴いている姿が見られる。

〔目名・科名〕	スズメ目アトリ科	埼玉県(2018)	RT	環境省(2014)	-
〔和名〕	ベニマシコ (越)				
〔学名〕	<i>Uragus sibiricus</i> (Pallas)	指定状況	-		
【形態】	全長 15cm。翼に2本の太い白帯、尾は長く外側が純白である。メスは褐色で黒い縦斑がある。				
【国内分布】	主に北海道で繁殖し、冬は本州以南に渡る。北海道・青森(繁殖)、本州、四国、九州。				
【主な生息環境】	繁殖期には平地の低木のある草原、川に沿った低木林、林縁などにすみ、ハマナス、ニワトコなどの低木の枝に営巣する。越冬時には低地から山地の低木の茂みや山麓・丘陵地に近い河川のヨシ原などにすむ。				
【県内での生息状況】	県内には冬鳥として低地から台地・丘陵帯、低山帯、山地帯に渡来する。台地・丘陵帯では狭山湖や入間川、高麗川、都幾川等の湖岸・河川敷などのヨシ原、あるいは谷戸の休耕田などのヨシ原で記録されている。低地帯では荒川河川敷などのヨシ原や疎林地に生息している。現在は記録数が増加傾向にあり、比較的小規模なヨシ原でも見られている。				
【特記事項】	「ピッポ」「フィフィフィ」などの柔らかい声で鳴く。種子類を好んで食べる。				

〔目名・科名〕	スズメ目ホオジロ科	埼玉県(2018)	RT	環境省(2014)	-
〔和名〕	ホオジロ (繁)				
〔学名〕	<i>Emberiza cioides</i> Brandt	指定状況	-		
【形態】	全長 16.5cm。オス成鳥は眉と顎が白く挟まれた頬が黒い、メス成鳥と若鳥は黒い部分が褐色となる。胸は全面茶褐色で、尾羽の外側が白い。				
【国内分布】	九州以北で繁殖し、冬季には暖地へ移動する留鳥あるいは漂鳥。				
【主な生息環境】	林縁の藪、植木畑周辺、河川敷の灌木等で繁殖するが、低地帯で繁殖に適する環境が減少している。冬は河川敷等で草本類の種子を採食しているところがよく見られる。				
【県内での生息状況】	県内では低地帯から山地帯まで留鳥として広く分布するが、現在は特に県南部の荒川沿いや見沼田圃等の低地での繁殖が少なくなっている。				
【特記事項】	繁殖期には、見通しのよい木の梢などに留まり大きな声でよく囀る。				

〔目名・科名〕	スズメ目ホオジロ科	埼玉県(2018)	RT	環境省(2014)	-
〔和名〕	クロジ (越)				
〔学名〕	<i>Emberiza variabilis</i> Temminck	指定状況	-		
【形態】	全長 16.5cm。オスは全身が灰黒色、メスは上面には黒褐色の縦斑がある。メスは全身が褐色。				
【国内分布】	留鳥または漂鳥として北海道から本州中部で繁殖し、冬季は本州中部以南に移動する。				
【主な生息環境】	夏季は亜高山帯のササなどの下層植生の豊かな樹林地で繁殖し、冬季は平地から山地の林などで越冬する。北海道では平地林でも繁殖する。				
【県内での生息状況】	山地帯から亜高山帯の林床がスズタケに覆われた森林に生息するが、現在、ニホンジカの採食影響により下層植生が失われ、繁殖適地が急減しているため、夏季の確認記録が極端に少なくなっている。冬季は平地の雑木林などに生息するが、越冬個体数はアオジほど多くない。春秋の渡り期には観察記録がやや多くなる。時には、人家の庭に姿を見せることがある。				
【特記事項】	旧大滝村(現秩父市)の都県境に位置する長沢背稜では、1996年7月13日に巣立ち後間もない幼鳥が記録されており、繁殖の可能性が高い。				

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
魚類・円口類
昆虫類
甲殻類
多足類
クモ目
軟体動物
扁形動物